

祖堂集卷第十四

江西下卷第一曹溪第二代法孫

江西馬祖、讓禪師に嗣ぐ。江西に在り、師諱は道一、漢州十方縣の人なり。姓は馬、羅漢寺に於いて出家す。讓、心眼を開きてより來た、南昌を化す。

毎に衆に謂いて曰く、汝今ま各おの自心是れ佛なることを信ぜよ、此の心即ち是れ佛心なり。是の故に達摩大師南天竺國より來たり、上乘一心の法を傳えて、汝をして開悟せしむ。又た數しば楞伽經の文を引いて以て衆生の心地に印す。汝、顛倒して自ら此の一心の法の各各之を有することを信ぜず。故に楞伽經に云く、佛語は心を宗と爲し、無門を法門と爲す、と。又た云く、夫れ法を求むる者は應に求むる所無かるべし。心外に別佛無く、佛外に別心無し。善を取らず、惡を捨てず、淨穢兩邊俱に依怙せず。罪性空に達すればなり。念念に不可得なり、自性無きが故に。三界は唯だ心のみ。森羅万像一法の印する所、凡そ見る所の色は皆な是れ心を見る。心は自ら心ならず、色に因るが故に心有り。汝、隨時に言説す可し、即事即理にして都て碍うる所無し。菩提の道果も亦復た是くの如し。心の生ずる所に於いて即ち名つけて色と爲す。色は空なりと知るが故に生は即ち不生なり。若し此の意を躰すれば、但だ隨時に著衣喫飯して聖胎を長養す可し。任運に時を過して更に何事か有らん。汝、吾が教を受けて吾が偈を聽け。曰く、心地は隨時に説く、菩提も亦た只だ寧し。事理俱に碍うる無く、生ずるに當つて則ち不生。

いつも修行者に云つた、みんないま各自に、自分の心が仏であると信じなさい。この心がそのまま仏心なのである。だから達摩大師は南天竺國からやって來られて、上乘一心の法を傳えて、みんなに悟りを開かせるのである。又たしばしば楞伽經の文句を引いて、衆生の心地にぴたり一致させて見せるのである。みんなが顛倒して、この一心の法は各自が所有しているということを信じないから、楞伽經にこう云っている、仏語は一心を宗とし、無門を法門とする、と。

師は又たこうも云った、そもそも法を求める者は、求めるところがないのでなければならぬ。心の外に別の仏はないし、仏の外に別の心はない。善も取らなければ、悪も捨てない。淨穢のどの側にも立たないのである。それは罪はそれ自体として空である。と見極めているからである。空なるものはいかなる刹那にも対象的には知覚できない、自体がないからである。

かくして三界は唯心ということになる。森羅万象には一法の刻印がある。およそ色を見るときはすべて心を見ているのである。しかし心はそれ自体として心なのではない。色と相待って心というものがあるのである。

そこでみんなは時のよろしきにしたがって言説するがよい。そのとき一事一事がそのまま理であって、なんのへだたりもないのである。菩提の道果もまた同様である。

ところで心が生じたものを色と名づけるが、色は空であると承知しているから、生じても生じないのである。もしこの意を体得したならば、ただ時のよろしきにしたがって著衣喫飯し、聖胎を長養して任運に時が過せる。ほかに何事があるうか。みんなわたしの教えを受けて、わたしの偈を聴きなさい。心地は時のよろしきに説く、菩提もまさに同様。事と理とへだたりなし、生も不生。

・上乘 最上乘。大乘の上にあるもの。禅宗を最上乘として格づけすることはすでに神会においても現われている。五祖弘忍の作とされる修心要論を最上乘論と名づけることを参照。

・心地 衆生之心猶如大地、五穀五果從大地生。如是心法生世出世、善惡五趣、有學獨覺、菩薩及於如來。以是因緣、三界唯心、心名爲地。一切凡夫、親近善友、聞心地法、如理觀察、如說修行。(大乘本生心地觀經卷八、大3-1337a)

・楞伽經云 馬祖が楞伽經の意を取って述べた語で、このままの言葉は楞伽經には見出されない。

・夫求法者應無所求 維摩經不思議品參照。

・不取善不捨惡 六祖壇經に「解脫香、即自心無所攀緣、不思善不思惡、自在無礙、名解脫香。」とあるのを參照。

・淨穢兩邊俱不依怙 傳大士行路難。

・達罪性空 維摩經弟子品「彼罪性不在内、不在外、不在中間。如佛所說、心垢故衆生垢、心淨故衆生淨。心亦不在内、不

在外、不在中間。如其心然、罪垢亦然。」とあるのを参照。

・森羅万像一法之所印 佛説法句經の句。

・心不自心、因色故有心 伝心法要に、「所謂心地法門、万法皆依此心建立。遇境即有、無境即無。不可於淨性上轉作境解」とあるのを参照。なお悟性論参照。

・長養聖胎 仁王般若經上菩薩行品に、「具此十心而能少分化諸衆生、超過二乘一切善地、是爲菩薩初長養心、爲聖胎故」とあるのにもとづく。

洪州城大安寺主にして講經講論の座主なる有り。只觀に馬祖を誹謗す。一日有つて、夜三更の時、鬼使來りて門を槌す。寺主云く、是れ什摩人ぞ。對えて云く、鬼使なり、來つて寺主を取らんとす。寺主云く、鬼使に啓す、某甲今年六十七歳なることを得たり。四十年講經講論して衆の爲に成持す。只觀に諍論を貪りて未だ修行することを得ず。且く一日一夜を乞わん、還た得たるや。鬼使云く、四十年來經論を講ずることを貪りて修行するを得ず。如今更に修行して什摩をか作す。渴に臨んで井を掘る、什摩の交渉か有らん。寺主適來道えり、只觀に經論を講ずることを貪りて衆の爲に成持すと。是の處有ること無し。何を以ての故ぞ。教に明文有り、自ら得度して他をして得度せしむ。自ら解脱して他をして解脱せしむ。自ら調伏して他をして調伏せしむ。自ら寂靜にして他をして寂靜ならしむ。自ら安隱にして他をして安隱ならしむ。自ら離垢して他をして離垢せしむ。自ら清淨にして他をして清淨ならしむ。自ら涅槃して他をして涅槃せしむ。自ら快樂にして他をして快樂ならしむ、と。是れ汝自身すら尚お乃ち未だ恬靜なることを得ずして何ぞ能く他をして道業成持せしめんや。汝見ずや、金剛藏菩薩、解脱月菩薩に告げて言く、我れ當に自ら正行を修し、亦た他に勸めて正行を修せしめん。何を以ての故ぞ。若し自ら正行を修行すること能わずして、他をして修せしむる者は是の處有ること無し、と。汝生死不淨の心を將つて口頭に取辨し、錯つて佛の教えを傳え、凡情を誑誑せり。此れに因りて彼の王は汝を嗔り、我をして取りて彼中に去らしむ。便ち刀樹地獄に入れて汝が舌根を断たん。終に免るるを得じ。汝佛語を見ざるや、言詞所説の法は小智が妄分別なり、

是の故に障碍を生じて自心を了せず。自心を了する能わざれば云何んぞ正道を知らん。彼は顛倒の慧に由りて一切悪を增長せんのみ。汝四十年來口業を作す。地獄に入らずして什麼をか作す。古教自ら明文有り、言語もて諸法を説くは實相を現わす能ず、と。汝は妄心を將つて口を以て乱りに説く、所以に必ず罪報を受けん。但だ嘖めて自ら嫌え、別人を怨むこと莫れ。如今速かに行け、若し遅晚せば、彼の王は吾を嗔らん。其の第二の鬼使云く、彼の王は早に是くの如きの次第を知れり。何ぞ他が与に修行せしむるを妨げらん。其の第一の鬼使云く、若し与摩ならば則ち一日の修行を放さん。某等彼中に去り、彼の王に諮白せん。王若し許さば明日便ち來らん。王若し許さざれば一餉時にして來らん。其の鬼使去りし後、寺主商量すらく、這個の事、鬼使は則ち許了すれども也た某甲一日にして作摩生んか修行せん。計る可き無し。天明を待たずして便ち開元寺に去き門を槌す。門士云く、是れ什摩人ぞ。對えて云く、大安寺主なり。來りて大師に起居す。門士便ち開門す。寺主便ち和尚の處に去き、具さに前事を陳す。後ち五躰投地し礼拝して起つ。云く、生死到來せり。作摩生んかすれば即ち是ならん。乞つ和尚慈悲して某甲が殘命を救え。師、他をして身邊に立地せしむ。天明けた了んぬ。其の鬼使來り、大安寺裏に主を討るも見ず。又た開元寺に來りて覓むるも得ず。轉じ去れり。師、寺主と即ち鬼使を見しも、鬼使は即ち見ざりき。僧拈じて龍華に問つ、只だ寺主の如きは、當時什摩の處に去りて、鬼使覓るも得ざりしや。花云く、牛頭和尚。僧云く、与摩ならば則ち國師當時也た太だ奇なり。龍花曰く、南泉和尚。

洪州のみやこの大安寺主は講經講論の座主であつたが、馬祖大師を誹謗してばかりいた。ある日の眞夜中のこと冥土の使いがやつて來て門をたたいた。寺主が云う、どなたです。こたえて云う、冥土の使いだ、お前さんをしょつぴくためにやつて來た。寺主が云う、お使いに申し上げます。わたしは今年で六十七になりました。四十年来經論を講じて人々のためにはからつて來ました。だがただ、あきもせず講論ばかりで、いまだ修行ができておりません。どうか一日一夜の猶予を願いたいが、よろしかろうか。冥土の使いが云う、四十年来がつつと經論を講じながら修行できずにおいて、いまさら修行してなにになるかというのだ。渴いてから井戸を掘ろうたつて、もう手おくれだ。お前さんいまだあくことなく經論を講じて人々のためにはからつたと云つたが、不可能だ。何故かといえばだ、教典に明文がある中略、お前さん自身さえ安泰でないのになんで他人に修行の世話などしてやること

ができようか。お前さん知らないのか、金剛藏菩薩が解脱月菩薩に言われたことを(中略)、お前さんは生死不淨の心で、口さきに事をなして、あやまって仏の教を伝え、罪のない人々をあざむいた。だから閻魔王はおいかりになり、しよつ引いて冥土に行かせようとなさるのだ。刀樹地獄に引き入れて、お前さんの舌の根を断ち切ってやるう、絶対逃げられんぞ。仏の言を知らないか、言葉で説かれた法は小智の妄分別である。そのせいで障碍が生じて自分の心のかたをつけれないのである。自分の心のかたがつけられなければ、どうして正道を知ろう。それどころか顛倒した智慧で、一切の悪を増長するばかりだ、と。お前さんは四十年來口業を作ってきたんだから、地獄に入らずしてなんとする。もともと古い教えに明文があるんだ。言葉で諸法を説いても実相を示すことはできない、と。お前さんは妄心をいだき、口に乱りに説いたのだから、罪報を受けるのは必然のなりゆきだ。ただ自分を責めて自分をにくめ。他人をうらんでではならんぞ。さあ、さっさと行け。もたもたしていると閻魔王からわしらがおこられるんだ。二番目の冥土の使いが云う、閻魔王はもうかくかくしかじかを知っておられるだろう。奴さんに修行させてやってもよからうじやないか。一番目の使いが云う、それなら一日修行させてやるう。わしらはあそこに帰って閻魔王に申し上げてみよう。もしお許しが出たら明日になって来よう。もしお許しが出なかつたらすぐ戻って来るぞ。冥土の使いたちが去つたあと寺主は思案した、わたしの申し出はお使い達はきいてくれたけれども、一日でどうやって修行しよう。どうしようもないなあ。そこで夜の明けのを待たずに開元寺に行き、門をたたいた。門番が云う、どなただ。こたえて云う、太安寺の住職です。馬祖大師の御機嫌うかがいに参りました。門番が門を開く。寺主はすぐ和尚のところへ行き、つぶさにできごとを述べた。そのあと五体投地して礼拝し、起き上つて云つた、一大事がやつて参りました。どうしたらよろしいでしょう。どうか和尚さんお慈悲をもつて、わたしの残命を救つて下さい。師は彼を身辺に立たせた。夜が明けた。冥土の使いたちがやつて来て、太安寺で寺主を探したが見当らない。こんどは開元寺に来て探したけれども見つからない。そこで帰つて行つた。師と寺主とは冥土の使いを目の当りに見たのであるが、冥土の使いは目の当りにしながら師と寺主とを見なかつたのである。

ある僧がこの話をとり上げて龍華に問う、その寺主なんですが、そのときどこに行つていて冥土の使いが探しても見つからなかつ

たのですか。龍華が云う、牛頭和尚さ。僧が云う、では国師はその時またはなはだ立派だったのですね。龍華が云う、南泉和尚さ。

・只観 只管であるつ。

・教有明文 八十卷華嚴經卷十九十行品の句大10—103。

・金剛藏菩薩告云 汝不見佛語、云、古教自有明文云 いずれも出典を明らかにし得ない。

・牛頭和尚 南泉の伝に云う、「問、牛頭未見四祖、百鳥銜花供養時如何。師云、只爲步步踏佛塹。見後爲什麼不來。師云、

直饒不來 猶較王老師一線道。」

・國師 伝灯録卷五、南陽慧忠の伝参照。

一日有つて齋後、忽然として一个の僧有り。來つて威儀を具す。便ち法堂に上つて師に參ず。師問う、昨夜什摩の處に在りしか。對えて曰く、山下に在り。師曰く、喫飯せしや。對えて曰く、未だ喫飯せず。師曰く、庫頭に去ゆきて覓めて喫飯せよ。其の僧應諾し、便ち庫頭に去く。當時百丈典座と造る。却つて自个に飯を分つて他に供養す。其の僧喫飯しりて便ち去る。百上法堂に上る。師問う、適來一个の僧有りて未だ喫飯するを得ず。汝供養し得たるや。對えて曰く、供養し了れり。師曰く、汝向後無量の大福德の人ならん。對えて曰く、和尚作摩生か与摩に説くや。師曰く、此は是れ辟支佛僧なり、所以に与摩に説く。進んで問う、和尚は是れ凡人、作摩生か他の辟支佛の礼を受けん。師云く、神通變化は則ち得たり、若もし一句の佛法を説かば、他は老僧に如かず。

ある日、齋座ののち、ひとりの僧が突然やつて来て、威儀を正して法堂に上り、師に參じた。師が問う、昨夜はどこにおられたか。こたえて云う、山下におりました。師が云う、喫飯したか。こたえて云う、まだ喫飯しておりません。師が云う、庫裏へ行つて、何か探して食事を済ませなさい。その僧は応諾して庫裏へ行った。その時百丈が典座をやっていた。齋後ではあったが、自分で飯を分けて、その僧に供養した。僧は食事を済ますと去つた。百丈が法堂に上つたとき師が問うた、さつき食事のまだな僧がい

たが、お前さん供養してあげたか。こたえて云う、供養しました。師が云う、お前さんはこれから無量の有福徳人になるぞ。こたえて云う、和尚さんなぜそう云われるのですか。師が云う、あれは辟支佛僧だったんだ、だからそう云ったのだ。進んで問う、和尚さんは普通の人間なのにどうして辟支佛僧の礼拝を受けられたのですか。師が云う、神通変化ではちゃんとしたものだが、一句の佛法という段になるとあれはわしには及ばん。

・辟支佛僧 雜阿含經二十三「時王見尊者實頭盧、頭髮皓白、辟支佛體。」(大2—169b)とある。

師、一日有つて、禅床に上り、纔かに与摩に坐するや便ち洩唾す。侍者問う、和尚適來什摩に困りてか洩唾せる。師云く、老僧這裏に在つて坐するや、山河大地森羅万像惣に這裏に在り。所以に他を嫌つて与摩に唾せり。侍者云く、此は是れ好事なり、和尚什摩としてか却つて嫌える。師云く、汝に於いては則ち好からむ。我に於いては則ち嫌う。侍者云く、此は是れ什摩人の境界ぞ。師云く、此は是れ菩薩人の境界なり。

後、鼓山此の因縁を擧して云く、古人は則ち与摩、是れ餘諸人、菩薩の境界すら尚お未だ得ず。又た故らに則ち他の菩薩を嫌う。是れ嫌うと雖も但だ以て先に菩薩の位を證得して後嫌えり。老僧未だ菩薩の位を得るを解せず、作摩生か他のこの事を嫌わん。

師はある日禅床に上つて、例の如く坐つたとたん唾をはいた。そこで侍者が問う、和尚さんいま何故唾をはいたのですか。師が云う、わしがここに坐つたら、山河大地、森羅万象がぜんぶここにあるじゃないか、だからそれがいやで唾はいたのだ。侍者が云う、それは結構なことなのに和尚さんどうしていやがるのですか。師が云う、お前さんにとっては結構かも知れんが、わしにはいやだ。侍者が云う、これは何人の境界ですか、師が云う、菩薩人の境界だ。

のち鼓山がこの因縁をとりあげて云う、古人はこうだった。お前さん方は菩薩の境界さえまだ得ていないのに、一方ではことさらに菩薩をきらいおる。古人はきらいはしたけれども、ただ身をもって先ず菩薩の位を證得してのちきらつたにすぎない。ところでのわしは未だ菩薩の位を得ることができないのだから、どうしてそのことをきららうつか。

・原文但以先證得菩薩之位後嫌也嫌老僧云とあるが、老僧の上の嫌は衍字と見てはぶく。

・鼓山の最後の語は、わしは菩薩人などというこわばった境界など得ることはできないから、山河大地森羅万像惣在這裏でもかまわないということであらう。

西川の黄三郎なる有り。兩個の兒子をして、馬祖に投じて出家せしむ。一年にして屋裏に却歸する有り。大人纔かに兩僧の生佛と一般なるを見るや、礼拝して云く、古人道えり、我を生む者は父母、我を成す者は朋友と。是れ你兩個の僧、便ち是れ某甲の朋友なり。老人を成持せよ。曰く、大人、年老ゆといえども若し此の心有らば、什摩の難きことか有らん。大人歡喜す。此れより便ち居士相にして、男の僧と共に便ち馬祖の處に到る。其の僧具さに來旨を陳す。大師便ち法堂に上る。黄三郎法堂前に到る。師曰く、咄、西川の黄三郎、豈に是ならずや。對えて曰く、不敬。師曰く、西川より這裏に到る。黄三郎、如今西川に在りや、洪州に在りや。云く、家に二主無く、國に二王無し。師曰く、年幾ぞ。云く、八十五。与摩いなりと雖則いども什摩の年歳をか算せん。云く、若し和尚に遇わざれば、虚しく一生を過ししならん。師に見し後、刀もて空を劃するが如し。師云く、若し實に此くの如くならば隨處に眞に任せん。西川の黄三郎というものがいたが、二人の息子を馬祖のもとで出家させた。それが一年たつて故郷へもどつて来た。おやじ二人の僧が生佛同様なを見たおとたん、礼拝して云つた、むかしの人が云つてゐる、我を生む者は父母、我を成す者は朋友、と。ほかでもないお前さん方二人こそわたしの朋友だ。どうかこのとしよりのためにはからつてくれ。息子が云う、おやじさん、年はとつていてももしその心があるんなら、なんの難しいこともありませんよ。

おやじは歡喜した。それから居士の姿のまま息子の僧とつれだつて、眞つ直ぐに馬祖のところによつて来た。息子の僧は具さ來た目的を述べた。そこで大師は法堂に上つた。黄三郎が法堂の前に至る。師が云う、咄！黄三郎、だな。こたえて云う、恐れ入ります。師が云う、西川からここに來た。黄三郎、今西川にいるのか、洪州にいるのか。こたえて云う、家に二主なく、國に二王はございません。師が云う、いくつだ。こたえて云う、八十五になります。師が云う、だとしてどんな年を取つたというのだ。

黄三郎が云う、もし和尚さんに会わなんだらむなく一生を過していただでありましよう。和尚さんにお目にかかったあととは、刀で空を割くようでございます。師が云う、もしほんとうにそうなら、どこへ行っても自由だ。

・ 古人道 列子力命篇に管仲の語とされている「生我者父母、知我者鮑叔也」という語のもじりであろうが、朋友という言葉は善友、善知識の意味に用いられている。

・ 家無二主、國無二王 馬祖への帰依を示す。

・ 雖則与摩等什摩年歳 八十五だとしても年だと云えたものではない。

黄三郎、一日有りて大安寺の廊下に到りて啼哭す。亮座主問う、什摩の事有りて啼哭するや。三郎曰く、座主を啼哭す。座主云く、某甲を哭して作摩。三郎曰く、還た道^はつを聞^くや。黄三郎、馬祖に投じて出家し、纔かに指示を蒙るや便ち契合すと。汝等座主葛藤を説きて什摩をか作す。座主此れ従り發心し、便ち開元寺に到る。門士、大師に報じて曰く、大安寺の亮座主來り、大師に參じ、兼ねて佛法を問わんと欲得す。大師便ち昇座^{しんぞ}す。座主來りて大師に參ず。大師問う、座主、六十本の經論を講じ得と説くを見る。是なりや。對えて云く、不敢。師云く、作摩生か講ずる。對えて云く、心を以つて講ず。師云く、未だ解^よく經論を講じ得ざるなり。座主云く、作摩生。云く、心は工技兒の如く、意は和技者の如し。争でか解^よく經論を講じ得るならん。座主云く、心既に講じ得ず。虚空を將つてせば還^また講じ得るや。師云く、虚空却つて講じ得。座主、意に在らず。便ち出でて纔かに堦を下るや大悟し、廻り來つて礼謝す。師云く、鈍根の阿師、礼拝して什摩をか作す。亮座主起ち來り、^{ばくばく}汗流る。晝夜六日大師の身邊に在りて侍立す。後ち諮白して云く、某甲和尚の左右を離れ、自ら省路を看て修行せん。唯願くは和尚久しく世間に住し、廣く群生を度せんことを。伏して惟るに珍重せよ。座主寺に歸り、衆に告げて云く、某甲一生の功夫、將に謂えり人の過ぎ得たる無しと。今日の下、馬大師の呵嘖を被り、直に情盡くるを得たり。便ち學徒を散却し、一たび西山に入るや更に消息無し。座主偈ありて曰く、三十年來餓鬼と作る、如今始めて得たり人身に復することを。青山自ら有り孤雲の伴、童子は從^ま他^かす別人に事^なつるに。

漳南拈じて僧に問う、虚空經を講ず、什摩人が聽衆と爲る。對えて云く、適來暫く隨喜し去り來たれり。漳南云く、是れ什摩の義か。云く、若し別人ならば便ち収取せしめん。漳南云く、汝も也た是れ火を把るの意あり。

黄三郎はある日のこと大安寺の廊下に行つて泣きだした。亮座主が問う、何か泣くようなことがあるのですか。三郎が云う、あなたのことを泣いておるのだ。座主が云う、わたしを泣いて下さつてどうなさるのです。三郎が云う、聞きおよびでしょう、このわたしが馬祖大師に投じて出家し指示を蒙るやいなや悟つたと。あなた方座主は理屈をこねるが何になるというのです。座主はこれをきつかけとして發心し、開元寺にやつて來た。門番が大師に知らせて云う、大安寺の亮座主どのが参りまして、大師に参じかたがた佛法を問いたいとのことです。そこで大師は昇座する。座主は來たつて大師に参ずる。師が問う、あなたは六十本の經論を講じることができると聞いておるが、ほんとうかな。こたえて云う、恐れ入ります。師が云う、どんな風に講ずるのだ。こたえて云う、心で講じます。師が云う、それでは經論を講ずることはできないぞ。座主が云う、どうしてですか。師が云う、心は主役のようであり、意は狂言回しのようであるといつてはいないか。どうして經論を講じ得ようぞ。座主が云う、心が講じ得ないのなら、虚空でやれば講じ得るのでしょうか。師が云う、実はその虚空が講じ得るのだ。座主は意味がわからないまま出て行つたが、階段を下りかけたとたん大悟して、もどつて來て礼謝した。師が云う、鈍根の阿師め、礼拝して何になる。亮座主は起ちあがつて、たらたらと汗を流した。それから六日のあいだ大師の身边に仕えていたが、のち打ち明けて云う、わたくし和尚のそばを離れて、自分で省路を看て修行しようと思ひます。どうか和尚さん長く世間にとどまられて、広く人々を救つてあげて下さい。恐れながらおん身大切に。

座主は寺に歸つて弟子たちに告げて云つた、わたしは、わたしが一生かけて積み上げたものは、誰も超えるものはないと独り決めていた。ところがいま馬大師の呵嘖をこつむつてみると、すっかり凡情がつきてしまった。そこですぐさま学徒を解散し、一旦西山に入ったかと思つと、もう何のたよりも無くなつてしまつた。

座主の偈に云う、三十年來餓鬼となり、いまやと人の身にかえることができた。青山にはもともと孤雲のつれがあつたのだ。

子供らよ、それぞれ別人につかえなさい。

漳南が拈じて僧に問う、虚空が経を講じるそうだ。どんな人が聞き手になるのだ。こたえて云う。いましばし隨喜して来たところだ。漳南が云う、なんの義だ。こたえて云う、別人だったら受けとらせたでしょう。漳南が云う、お前さんも火をとる気概があるってわけだな。

・心如工伎兒云 四卷楞伽經卷四に「心爲工伎兒、意如和伎者。五識爲伴侶、妄想觀伎衆。」とあるによる。

・不在意 気がつかない。法集別行録節要并私記に「古人云、佛法貴在行持、不取一期口辨、切須在意、切須在意」とあるのを参照。

・自看省路修行 省路という語がわかりにくい、内省の路というほどの意味が。

・是什麼義 了義不了義等々。

・若是別人、便教收取 その義は、わたし以外のものにだつたら自分を受けとらせていたでありましょう。何の義であろうとわたしは受けとるものではない。

・汝也是把火之意 何の義であろうと焼いてみせるといふわけだ。臨済が禅版机案を焼こうとした話。丹霞が木仏を焼いた話を想起せしめる。

師、上堂し良久す。百丈、面前の席を収却す。師便ち堂を下る。

師は上堂してやや黙している。百丈が目の前のおもしろを取りおさめてしまふ。すると師は堂を下る。

・碧巖録五三則参照。

問う。如何なるか是れ佛法の旨趣。師云く、正に是れ汝が身命を放つ處のみ。

問う、何が仏法の旨趣でしようか、師が云う、お前さんが身命をなげつつところだ。

問う、請う和尚、四句を離れ、百非を絶して西来意を直指せよ。多説を煩わさざれ。師云く、我れ今日心情無し、汝が爲に説く能わず。汝は西堂に去ぎ、智蔵に問取せよ。其の僧西堂に去きて具さに前問を陳ず。西堂云く、汝は何ぞ和尚に問わざる。僧云く、和尚は某甲をして来たりて上座に問わしむ。西堂便ち手を以つて頭を點じて云く、我れ今日可殺だ頭痛す。汝が爲に説く能わず。汝去きて海師兄に問取せよ。其の僧又た百丈に去きて乃ち前問を陳ず。百丈云く、某甲、這裏に到りては却つて會せず。僧却つて師に舉似す。師云く、藏頭白、海頭黒。

問う、どうか和尚さん四句を離れ、百非を絶して西来意を直示して下さい。こたこた云わんで下さいよ。師が云う、わしは今日気がのらんでお前さんに云つてやる事ができん。西堂に行つて智蔵に聞いてごらん。その僧は西堂に行つて前問をそのまま述べる。西堂が云う、お前さんどうして和尚に聞かないのだ。僧が云う、和尚があなたに聞きに来させたのです。すると西堂は手で頭にさわつて云う、今日はひどく頭痛がするので、お前さんに云つてやる事ができん。お前さん海師兄に聞いてごらん。その僧今度は百丈のところへ行つて前問を述べる。百丈が云う、わしはそこんところになると実はわからんのだ。その僧があとで師にその話をする。師が云う、白頭の智蔵、黒頭の懷海。

・ 藏頭白海頭黒、頭白頭黒の語は、法華經從地涌出品の父子而子老の話を想起せしめる。

・ 碧巖録七三則参照。

師、人を遣わして書を送りて先の径山欽和尚の處に到らしむ。書中只だ圓相を畫くのみ。径山纔に見るや、筆を以つて圓相中に一劃を与つ。人有り忠國師に舉似す。忠國師云く、欽師又た馬師の惑を被れり。

師は使いをやって、手紙を先の径山欽和尚のところへとどけさせた。手紙の中には円相が画いてあるだけである。径山見るやい

なや筆をとって円相の中に一本線を引いた。ある人がこの話を忠國師にした。忠國師が云う、欽先生また馬先生にやられたな。

人有り師の前に於いて四劃を作る。上の一劃は長く下の三劃は短し。云く、一は長しと道づを得ざれ、二は短しと道づを得ざれ。此の四句を離るるの外、請う師、某甲に答えよ。師乃ち一劃を作りて云く、長しと道づを得ざれ、短しと道づを得ざれ。汝に答えられ。忠國師擧するを聞き、別に答えて云く、何ぞ某甲に問わざる。

座主有りて師に問う、禅宗何法を傳持するや。師却つて問う、座主何法を傳持するや。對えて曰く、四十本の經論を講じ得。師云く、是れ師子兒なること莫きや。座主云く、不敢。師嘘嘘の聲を作す。座主云く、此れも亦た是れ法なり。師云く、是れ什摩法なりや。對えて云く、師子出窟の法なり。師乃ち嘿然たり。座主云く、此れも亦た是れ法なり。師云く、是れ什摩法なりや。對えて云く、師子在窟の法なり。師云く、不出不入是れ什摩法なりや。座主無對、遂に辞して門を出づ。師召して云く、座主。座主應諾す。師云く、是れ什摩ぞ。座主無對。師呵して云く、這の鈍根の阿師。後百丈代つて云く、見るや。

ある座主が師に問う、禅宗はどんな法を伝持しているのですか。師は逆にたずねる、あなたはどんな法を伝持しているのか。こたえて云う、四十本の經論を講じ得ます。師が云う、獅子ですな。座主が云う、どういたしましたして。師は嘘嘘の声をなす。座主が云う、それも法です。師が云う、どんな法だ。窟に居る獅子の法です。師が云う、出もせず入りもしない獅子の法はどんな法だ。座主はこたえられない。そこで挨拶して門を出ようとする。師が呼んで云う、座主。座主は返事をする。師が云う、なんだ。座主はこたえない。師は呵して云う、この鈍根の阿師め。のち百丈が代つて云う、見えますか。

・後百丈代云見摩 後の無對に代つたものと思われるが、伝灯録では前の無對の下に、百丈代云見摩とある。

師、僧に問う、什摩いすれの處より来たるや。對えて云く、淮南より来たり。師云く、東湖水満てるや。對えて云く、未し。師云く、如許多の時雨ありしに水尚お未だ満たざるか。道吾云く、満ちたり。雲岳云く、湛湛底。洞山云く、什摩の劫中に曾って欠小し来たるや。

師が僧に問う、どこから来たか。答えて云う、淮南から来ました。師が云う、東湖は水が一杯か。答えて云う、まだです。師が云う、あんなに沢山いい雨が降ったのに、水がまだ一杯でないとは。道悟が云う、一杯です。雲岳が云う、湛湛としています。洞山が云う、何の劫中に足りないことがあったのですか。

・道吾以下の答えは、僧の未しに代って云ったものであろう。

師、明晨遷化せんとせし今日の晩際、院主問う、和尚は四躰違和す。近日如何ん。師曰く、日面佛、月面佛。

師が明日遷化しようとした今日の夜、院主が問うた、和尚お身体の調子が悪いそうですが、近ごろはどうですか。師が云う、日面佛、月面佛。

・日面仏月面仏 仏名経七によると、日面仏は千八百歳の長寿の仏。月面仏は一日一夜の短命の仏だという。「それ、仏にさえ寿命の長短があるのだ」という超然たる心境。碧巖録第三則参照。

汾州和尚座主た爲りし時、四十二本の經論を講ず。来たりて師に問う、三乘十二分教は某甲粗ぼ知れり。未審いぶかし宗門中の意旨如何ん。師乃ち顧示して云く、左右人多し、且く去れ。汾州門を出でんとし、脚纒かに門闌を跨ぐや、師、座主を召す。汾州頭を廻らして應諾す。師云く、是れ什摩ぞ。汾州當時に便ち省す、遂に礼拝し起ち来たつて云く、某甲四十二本の經論を講じ、將に謂えり人の過ぎ得る無しと。今日若し和尚に遇わざれば泊合ほとんど空しく一生を過せしならん。

汾州和尚は座主であった時四十二本の經論を講じた。それがやって来て師に問う、三乘十二分教はわたくしほぼ知っております。

ところで禅門の趣旨はどのようですか。そこで師はあたりを見て云う、左右に人が多い、今は立ち去りなさい。汾州和尚門を出ようとして、脚がしきいをまたいだとたん、師が座主と呼んだ。汾州和尚ふり向いて返事をする。師が云う、なんだ。汾州和尚の時ずぐにはっと気付いた。そこで礼拝し立ち上って云った、わたくし四十二本の経論を講じて、自分を超えるものはないと思ひ込んでおりました。今日もし和尚に会わなければ、あやつく一生を空しく過してしまつてころでした。

師、百丈に問う、汝は何の法を以て人に示すや。百丈拂子を竖起して師に對す、云く、只た這个のみか、爲當別に更に有りや。百丈拂子を抛下す。僧拈じて石門に問う、一語の中便ち馬大師の兩意を占めて請う和尚道え、石門拂子を拈起して云く、尋常抑え得ざるのみ。

師が百丈に問う、お前さんどんな法を人に示すか。百丈は払子を立てて師に向つて立つ。師が云う、それだけか、それともほかにあるのか。百丈は払子をほおり出す。僧がこの話をとり上げて石門に問う、一語で馬大師の兩意を占める仕方かどうか和尚さんおっしゃって下さい。石門は払子をとりあげて云う、ふだんから抑えきれないのだ。

・馬大師兩意というのが何を指すのかわからない。

大師の下、親承の弟子惣じて八十八人ありて世に出現す。隱遁せし者に及びては其の數を知る莫し。大師志性慈愍にして容相瓌奇たり。足下に二輪あり、頸に三約有り。説法住世四十餘年。玄徒千有餘衆あり。師、貞元四年戊辰の歲二月一日遷化せり。塔は泐潭の寶峯山に在り。勅謚大寂禪師大莊嚴の塔なり。裴相額を書す。左承相護得輿碑文を撰す。淨修禪師頌して曰く、馬師道は一にして、行くゆく金石を全つす。本を悟りて超然たるも、枝を尋ねて勞役す。久定の身心、一時に拋擲し、大いに南昌を化すも、寒松千尺。

大師の親承の弟子で世に出たものは惣じて八十八人である。隱遁したものには數が知れない。大師は人となりいつくしみ深く、容貌には風格があつた。足つらに二輪の模様があり、首に三すじのくびれがあつた。法を説いて世にとどまること四十余

年、玄徒千有余衆であつた。

師は貞元四年戊辰の歳二月一日遷化された。塔は泐潭の宝峯山に在る。勅謚大寂禪師大莊嚴の塔という。宰相裴休が額をかけた。左承相権徳輿が碑文をかけた。

淨修禪師の頌に云う、馬祖大師道は一すじ、金石のころざしをまっとうして歩む。本源を悟つて超然としていたが、枝葉に心をくだいてつとめもした。久しい定にある身心を一時になげうち、ねんごろに南昌の地を教化したが、近よりがたいもの千尺の寒松のごとくであつた。

・三約　どんなものはつきりしないが、右のように解しておく。

・護得輿　正しくは権徳輿。

・道一　師の名がかけてある。

・尋枝勞役　律行を持するに嚴であつたことを指す。

大珠和尚、馬大師に嗣ぐ、越州に在り。師諱は慧海、建州の人なり。

師衆に謂いて曰く、汝が心はれ佛、佛を將つて佛を求るを用いず。汝が心はれ法、法を將つて法を求むるを用いず。佛と法と和合して僧躰と爲るを喚んで一躰三寶と作す。經に云く、心佛及衆生、是三無差別と。身口意業清淨なるを佛出世と名づけ、三業不淨なるを佛滅度と名づく。喩えば、嗔る時喜無く、喜ぶ時嗔無きが如し。唯だ是れ一心にして用に二躰無し。本智法全なれば無漏現前す。蛇は化して龍と爲るも其の鱗を改めず。衆生は心を廻らして作佛するも其の面を改めざるが如し。性は本より清淨にして修成を待たず、證する有り求むる有るは即ち増上慢に同じ。眞空にして滞り無し。應用に時無く、始めも無く終りも無し。利根先悟すれば用に等等無し、即ち是れ阿耨菩提なり。性に形相無し、即ち是れ微妙色身なり。無相は即ち是れ實相なり。性躰本空則ち是れ無邊法身なり。万行莊嚴具す即ち是れ功德法身なり。即ち是れ万化の本にして、處に隨つて名を立つ。智用無盡なる即ち是れ無盡藏なり。能く

万法を生ずる是れ大法藏なり。一切智を具する是れ智慧藏なり。万法は如に同じければ是れ如來藏なり。經に云く、如來なる者は則ち諸法如の義なり、と。一切世間生滅の法、一法として如に歸せざる有ること無し。

・心佛及衆生是三無別 六十卷華嚴經夜摩天宮菩薩說偈品の有名な句。

・蛇化爲龍云 史記外戚世家に「蛇化爲龍、不變其文」とある。

・廻心 心の向きを変えること。寒山詩に「説食終不飽、説衣不免寒。飽喫須是飯、著衣方免寒。不解審思量、只道求佛難

廻心即是佛、莫向外頭看」とあるのを参照。

・有證有求即同増上慢 維摩經觀衆生品に「若有得有證者、則於佛法爲増上慢」

・利根先悟 頓悟要門には利根頓悟とある。

・隨處立名 立名は、臨濟録に「三界不自道我是三界、還是道流目前靈靈地照燭萬般、酌度世界底人、與三界安名」とい

時の安名に同じ。

・如來者則諸法如義 金剛經の句。

王長史なる有りて問う、法師、律師、禪師、阿那个か最勝なる。師云く、法師なる者は師子座に踞し、懸河の辯を瀉ぐ。稠人匡衆に對して玄關を啓鑿し、般若の妙門を開き、三輪の空際を等しく。若し龍象にして蹴踏するに非ざれば安んぞ敢えて人に當らんや。律師なる者は毘尼の法藏を開きて名利雙行す。持犯開遮、威儀は則と作る。三翻の羯摩を疊し、四果の初因と作す。若し宿徳の白眉に非ざれば安んぞ敢えて造次にせん。禪師なる者は其の樞要を撮り、直に心源を了す。出沒卷舒して縦横に物に應ず。咸な事理を等しくして頓に如來を見る。生死の深根を抜きて現前の三昧を得。若し安禪靜慮せざれば、者裏に到りて惣に須らく懽然たるべし。

・稠人匡衆 頓悟要門には稠人廣衆とある。

・龍象蹴踏 維摩經不思議品「龍象蹴踏、非驢所堪」。

・安敢當人 頓悟要門は安敢當斯とする。當人のまま読めば、人は法師を指すことになる。

・名利雙行 可怪しな云い方だが、良い意味で名譽と利益を得るといふことであるつか。

・持犯開遮 持戒犯戒開許遮止。

・安禪 維摩經略疏四に宴坐の語を説明して「今明宴之言安、安住根本淨禪乃至滅定、息外勞累云」とあるのを参照。

なお若不安禪云の句は坐禪儀に引かれている。

座主有りて問う、某甲禪師の義を問わんと擬す、得たりや。師曰く、清潭の月影意に任せて撮摩す。

ある座主が問う、わたくし禪師とはどういふものかをつがいたいと思いますが、よろしいか。師が云う、澄んだ水の月を思つ
ままにしろ。

問う、如何なるか是れ佛。師曰く、清潭に對面するは佛に非ずして誰ぞ。座主茫然たり。却つて問う、禪師は何法を説きて人を度するや。師云く、未だ曾つて法有らず。座主云く、禪師渾て此の如し。師却つて問う、法師は何法を説くや。對えて云く、金剛經を講ずること二十餘座あり。師曰く、金剛經は是れ誰か説ける。對えて云く、禪師豈に知らずや、是れ佛説なるを。師云く、若し如來に所説の法有りと言わば則ち佛を謗ることを爲す。是の人は我が所説の義を解する能わず。若し經は佛説ならずと言わば即ち經を謗ることを爲す。此を離るるの外、老僧の爲に説け。法師無對。師曰く、其の義は且く置く。經に云く、若し三十二相を以つて如來を觀れば、轉輪聖王即ち是れ如來なり。又た云く、若し色を以て我を見れば乃至如來を見る能わずと。經は且く置き、小時を待つて徵せん。大徳、且く道え那个か是れ如來。對えて云く、這裏に到りては却つて迷い去る。師呵して云く、經を講ずること二十餘座にして渾て如來を識せざるか。師云く、如來なる者は則ち諸法如義なり。大徳那んぞ知らざるを得ん。法師云く、若し是くの如ければ則ち一切皆如ならん。師云く、未だ是ならず、未だ是ならず。法師云く、經は此の説を作す。那んぞ是ならざるを得ん。師云く、法

師如なりや。對えて云く、如なり。師云く、木石如なりや。對えて曰く、如なり。師又た云く、汝と木石と如なりや。對えて曰く、二如無し。師云く、与摩ならば則ち大徳草木と(共)何ぞ別たん。法師無對。乃ち嘆いて曰く、此の上人極めて酬對すること難し。時に俗官有り。法師に問う、何が故に禪を信ぜざるや。師云く、名相は解し易く、至理は見ることに難し。

・清潭對面非佛而誰 澄んだ水をのぞき込んでお目にかかるのは佛でなくて誰だ。

・若言如來云 金剛經に「若人言如來有所說法、即爲謗佛、不能解我所說故」とあるのによる。

・經云 金剛經。

・如來者則諸法如義 前出。

・此上人極難酬對 維摩經文殊師利問疾品中の語。

行者あんじや有りて問う、即心即佛、那个か是れ佛なる。師云く、汝は那个か是ならずと疑うや、指出し看よ。行者無對。師云く、達すれば則ち遍境是、悟らざれば則ち永く乖疎す。

ある行者が問う、即心即佛といいますがどれが佛であるのですか。師が云う、お前さんどれがでないと疑っているのか示してみなさい。行者は答えられない。師が云う、わかればどこに居てもであるし、悟らなければいつまでもはなればなれだ。

・頓悟要門に「僧問、何者是般若、師曰、汝疑不是者試説看」とあるのを参照。

華嚴の座主數人問う、禪師は何ぞ青青たる翠竹是れ法身、鬱鬱たる黄花是れ般若なりと許さざる。師云く、法身無像、翠竹に對して以て形を成す。般若無知、黄花に對して相を現す。彼の黄花翠竹に非ずして般若法身有らんや。經に云く、佛の眞法身は猶お虚空の若し。物に應じて形を現すること水中の月の如し、と。黄花若し是れ般若ならば般若は則ち無情に同じからん。翠竹若し是れ法身ならば翠竹は還はた同じく物に應ずるや。大徳數人口を杜ざして言無し。

・青青翠竹云 神会語録、慧忠國師の伝、帰宗和尚の伝等参照。

・法身無像云 涅槃無名論に「法身無象、應物而形、般若無知、對縁而照」とあるによる。

・非彼黄花翠竹而有般若法身乎 彼の黄花翠竹に対せずして般若法身はないのである。

・經云 金光明經卷二の句。

百丈政和尚、馬大師に嗣ぐ。江西に在り。未だ行録あんろくを觀ずして化縁の始終を決せず。

師、僧に向つて道う、汝我が與に開田し了らば、汝が爲に大義を説かん。僧云く、開田し了れり。請う師大義を説け。師乃ち兩手を展開す。

老宿有り。日影の牕を透過するを見て問う、爲復はた牕の日に就くや、爲復日の牕に就くや。師云く、長老房内に客有り、且らく歸り去らば好し。

ある老宿が、日光の窓からさし込むのを見て問うた、窓が日光に接しているのですか。日光が窓に接しているのですか。師が云う、あなたの部屋にお客です。帰られたらよろしかろつ。

・師の答は、主が客に接するのか、客が主に接するのか、自分で確かめてみなさいというのである。六祖壇經に「時有風吹、旛動、一僧曰風動、一僧曰旛動、議論不已。慧能進曰、不是風動、不是旛動、仁者心動。一衆駭然」とあるのを参照。

杉山和尚、馬大師に嗣ぐ。池州に在り、師諱智堅、未だ實録を觀ざれば化縁の始終を決せず。

雲岳月を見て問う、太だ好き月なり。師云く、還た照らすや。雲岳頭を低却す。

・低却頭 夾山和尚の伝にも同じ動作をするところがあるが、相手への批判を籠めて黙り込むもののようにである。

師、南泉に在りて第一座と造る。南泉生を収むる次いで云く、生。師云く、無生。泉云く、無生猶お是れ末。南泉行くこと五六歩。師召して云う、長老。南泉頭を廻らして云く、作摩。師云く、是れ末と道う莫れ。

後に人有つて拈じて順徳に問う、南泉の生と道う、意作摩生。順徳云く、急水に舟を行る。杉山無生と道う、意作摩生。徳云く、風若し来らざれば樹も亦た動かす。無生猶お是れ末、意作摩生。徳云く、鋒を磨して刃を捺せば汝は且らく作摩生か迴避せん。南泉を喚ぶ。意作摩生。勝令を擧げんと要して、別に旋らして行持せしむ。南泉頭を廻らす。意作摩生。徳云く、象王迴旋し師子嘯呻す。是れ末と道う莫れ、意作摩生。徳云く、妙个の出身、古今有ること罕なり。

安國拈じて明上座に問う、古人當に無生なるべきや、當に無生なるべからざるや。對えて曰く、當に無生なるべからず。安國云く、杉山意作摩生。明上座無對。明眞大師代つて云く、汝試みに擧し看よ。

師が南泉和尚の下で第一座となつていたときのこと。南泉が生飯をあつめるおりに云つた、生。師が云う、無生。南泉が云う、無生はなお未だ。南泉は五六歩行きかける。師が呼びかけて云う、長老。南泉はふり向いて云う、どうした。師が云う、未だなどと云つて下さるな。

後にある人がこの話をとり上げて順徳和尚に問う、南泉が生と云つたのはどういふつもりですか。順徳が云う、急流に舟を行っている。杉山が無生と云つたのはどういふつもりですか。風が吹かねば木もまたゆれない。無生はなお未だと云つたのはどういふつもりですか。切先を磨いてつきつけられたら、お前さんならどうさける。南泉を呼んだのはどういふつもりですか。勝令を擧揚しようとして、格別にとりもって行持させたのだ。南泉がふり向いたのはどういふつもりですか。象王迴旋し師子嘯呻す。未だと云つて下さるなといったのはどういふつもりですか。古今まれに見る妙なる出身だ。

安国がこの話をとり上げて、明上座に問う、古人は無生であるべきか、無生であるべきでないか。答えて云う、無生であるべきではありません。安国が云う、では杉山和尚が無生と云ったのはどついつもりだ。明上座は答えられない。明眞大師代って云う、お前さんためしに提起してみなさい。

- ・ 生 禪林象器箋生飯に云う「舊説曰、施鬼界衆生之飯、故曰生飯」
- ・ 勝令 仏法を云うのであろうか。
- ・ 行持 正法眼蔵に行持の巻がある。
- ・ 象王廻旋 福先和尚の伝に「問、昔日覺城東際象王廻旋、今日閩領南方如何提接云とある。
- ・ 順徳 鏡清和尚のこと。
- ・ 明上座 伝灯録二十二巻に見える福州僊宗院明禪師。
- ・ 明眞大師 安国のこと。

師、南泉と火に向う次いで南泉師に問う、東を指し西を指すことを用いずして本分の事直下に道もい將も来れ。師便ち火筋を把つて放下す。南泉云く、饒もい你も与も摩もなるも猶お王老师に一綫道を較す。南泉又た趙州に問う、趙州手を以て圓相を作り、中心に一點す。泉云く、饒もい你も与も摩もなるも猶お王老师に一綫道を較す。雲門擧するを聞いて云く、南泉は只だ是れ歩歩高きに登りて、空裏より放下することを解せず。

師が南泉和尚と火にあたつてゐるとき、南泉が師に問うた、あれこれ云わないで本分の事をずばりと云つて来なさい。すると師は火ばしをとつて下に置いた。南泉が云う、たといそつでもなおこのわしとは一すじ違つ。南泉は今度は趙州に問うた。趙州は手で圓相を描き、中心に一點を打つた。南泉が云う、たといそつでもこのわしとは一すじ違つ。雲門がその話を聞いて云つた、南泉和尚はひたすら高みに登るばかりで、空中から下に降りることを知らない。

問う、如何なるか是れ本来身。師云く、世を擧げて相似す。

師、蕨菜を提起して南泉に問う、這個はただ供養するに好し。南泉云く、但だ這個のみに非ず、百味珍羞も亦た顧みず。師云く、此の如しと雖然も、いへど 今個に須らく他を嘗して始めて得べし。

師がわらびをとりあげて南泉に問う、これは供養するにつつてつた。南泉が云う、これだけじゃない、どんな御馳走もかれは受けつけんよ。師が云う、そうかも知れんが、一つ一つ味わってみてはじめて良しとせねばならんのだ。

・惣須嘗他始得 原文嘗は償とする。伝灯録によつて改める。なお伝灯録においては問答の主客が入れかわっている。

茗溪和尚、馬大師に嗣ぐ、未だ行録を覩ざれば化縁の始終を決せず。

問う、如何なるか是れ修行の路。師云く、好今の阿師、客と作ること莫れ。僧云く、畢竟如何ん。師云く、安置することは則ち敢えてせず。

問う、どのようなのが修行の路でしょうか。師が云う、せつかくの坊さんだ、旅客になつてはならない。僧が云う、つまりどうなのですか。師が云う、落着くことはわしはようやらん。

・莫作客 楞嚴經卷一に「我初成道、於鹿園中、爲阿若多、五比丘等、及汝四衆、言一切衆生不成菩提及阿羅漢、皆由客塵煩惱所誤。汝等當時、因何開悟、今成聖果。時憍陳那起立白佛、我今長老、於大衆中、獨得解名、因悟客塵二字成果。世尊、譬如行客、投寄旅亭、或宿或食、宿食事畢、俟裝前途、不遑安住。若實主人、自無攸往。如是思惟、不住名客、住名主人。以不住者、名爲客義」とあるのを参照。

師、時有つて云く、吾に大病有り、世の醫する所に非ず。人有り先の曹山に問つ、古人に言有り、吾に大病有り、世の醫する所に非ず、と。未審し、喚んで什摩病と作すや。曹山云く、攢簇し得ざる底の病。僧云く、一切衆生に還た此の病有りや。曹山云く、人盡く有り。僧云く、一切衆生什摩と爲てか病まざる。山云く、衆生若し病めば則ち衆生に非ず。僧云く、和尚還た此の病有りや。山云く、正に起處を覓むるに不可得なり。僧云く、未審し諸佛還た此の病有りや。山云く、有り。進んで曰く、既に有るに什摩と爲てか病まざる。山云く、伊は惶惶たるが爲なり。

・攢簇不得底病 攢簇はちらばっているものを取り集めること。あらゆる症状が、身体のあらゆる個所に現われるような病。したがつて眼病とか胃病、あるいは風邪とか腹痛などという名前がつけられない。

・正覓起處不可得 即ち攢簇不得底。

問つ、如何なるか是れ正修行の路。師云く、涅槃後に有り。僧云く、如何なるか是れ涅槃後に有る。師云く、洗面すること無し。僧云く、學人不會。師云く、面の洗う可き無し。

問つ、どのようなのが正修行の路ですか。師が云つ、涅槃後に有る。僧が云つ、涅槃後に有る路とはどのようなものですか。師が云つ、顔を洗わない。僧が云つ、わたくしにはわかりませんが。師が云つ、洗うべき顔がないのだ。

・涅槃後有 伝灯録九瀉山の伝に「師問雲巖云、聞汝久在藥山、是否。巖云、是。師云、藥山大人相如何。雲巖云、涅槃後有。師云、涅槃後有如何。雲巖云、水灑不著」とあるのを参照。

・無洗面 伝灯録二十六瑞鹿和尚の伝に「又云、晨朝起來洗手面盥漱了、喫茶。喫茶了、佛前禮拜。佛前禮拜了、和尚主事處問訊。和尚主事處問訊了、僧堂裏行益。僧堂裏行益了、上堂喫粥。上堂喫粥了、歸下處打睡。歸下處打睡了、起來洗手面盥漱。起來洗手面盥漱了、喫茶。喫茶了、東事西事。東事西事了、齋時僧堂裏行益。齋時僧堂裏行益了、上堂喫飯。上

堂喫飯了、盥漱。盥漱了、喫茶。喫茶了、東事西事。東事西事了、黄昏唱禮。黄昏唱禮了、僧堂前喝參。僧堂前喝參了、主事處喝參。主事處喝參了、和尚處問訊。和尚處問訊了、初夜唱禮。初夜唱禮了、僧堂前喝珍重。僧堂前喝珍重了、和尚處問訊。和尚處問訊了、禮拜行道誦經念佛。如此之外、或往莊上、或入郡中、或歸俗家、或到市肆。既有如是等運爲、且作麼生說箇勿轉動相底道理、且作麼生說箇那伽常在定、無有不定體底道理、還說得麼。若也說得、一任說取。珍重」とあるのを参照。

石鞏和尚、馬大師に嗣ぐ、撫州に在り。師諱は慧感。未だ出家せざる時、鹿を趁いて馬大師の庵前従り過ぐ。問う、和尚、還た我が鹿の過ぐるを見しや。馬大師云く、汝は是れ什麼人ぞ。對えて云く、我は是れ獵人なり。馬師云く、汝解く射るや。對えて云く、解く射る。馬師云く、一箭もて幾個を射るや。對えて曰く、一箭もて一個を射る。馬師云く、汝渾に射ることを解せず。進んで曰く、和尚は是れ解く射ること莫きや。馬師云く、我れ解く射る。進んで曰く、一箭もて幾個を射るや。師云く、一箭もて一群を射る。師云く、彼此生命なり。何ぞ他かれを射るを得るや。師云く、汝既に此の如しと知る。何ぞ自ら射ざる。師曰、若し某甲をして射せしむるも手を下す處無し。師云く、者こゝの漢無明煩惱一時に頓に消せり。師當時に弓箭を拗折し、刀を將つて髪を截ち、師に投じて出家せり。

石鞏和尚は馬大師に法を嗣いで撫州に住した。諱は慧感である。まだ出家していなかった時、鹿を追つて馬大師の庵前を通りかけた。馬大師にたずねて云う、和尚さん、わたしの鹿が通るのを見ませんでしたか。馬大師が云う、お前さん誰だ。答えて云う、わたしは狩人です。馬大師が云う、お前さん射れるのか。答えて云う、射れます。馬大師が云う、一本の矢でどれだけを射るのか。答えて云う、一本の矢で一匹です。馬大師が云う、お前さんまったく射ることができんな。進んで云う、和尚さんは射ることができるので、馬大師が云う、わたしは射ることができぬ。進んで云う、一本の矢でどれだけを射るのですか。馬大師が云う、一本の矢で一群を射るのだ。師が云う、あれ達も自分達も生命あるものです。どうしてあれ達を射るなんてことができるのですか。師が云う、お前さんそうだとわかつているのなら自分を射たらいじやないか。師が云う、わたしに自分を射るとおっしゃったって、

やりようがありません。馬大師が云う、この男、無明煩惱が一時にきれいさっぱり消えたぞ。師はその場で弓矢を折り、刀で髪を断ち、馬大師に投じて出家した。

師、後ち因みに厨に在りて作務する次いで、馬師問う、什摩をか作なせる。對えて云く、牛を牧す。馬師曰く、作摩生か牧する。對えて曰く、一廻草に入り去らば、便ち鼻孔を把つて拽き來。馬師云く、子は眞に牛を牧す。

・佛遺教經に云う、「汝等比丘、已能住戒、當制五根、勿令放逸、入於五欲。譬如牧牛之人、執杖視之、不令縱逸、犯人苗稼」とあるのを参照。

師、西堂に問う、侏は還はた解よく虚空を捉え得るや。西堂云く、捉え得。師云く、作摩生か捉うる。西堂手を以つて虚空を撮する勢を作なす。師云く、与摩にして作摩生か虚空を捉え得ん。西堂却つて師に問う、作摩生か捉うる。師便ち西堂の鼻孔を把つて拽着す。西堂忍痛の聲を作なして云く、太殺はだ人の鼻孔を拽きて、直に脱し去ることを得しむ。師曰く、直に須らく与摩に他かの虚空を捉えて始めて得べし。

師が西堂に問う、お前さん虚空をつかむことができるか。西堂が云う、つかめる。師が云う、どうつかむか。西堂は手で虚空をつまむ格好をする。師が云う、そんなんでどうして虚空がつかめるもんか。西堂の方から師に問う、どうつかむのか。師はすかさず西堂の鼻をつかんでしたたかに引っぱる。西堂は痛そうな声を張りあげて云う、ひどいこと人の鼻を引っぱりやがって、抜けるじゃないか。師が云う、こつこつふうに虚空をつかんでこそはじめて合格だ。

・西堂作以手撮虚空勢 原文には作の字が脱落している。

時有つて僧參ずる次いで、師云く、適來什摩いすれの處に去り來たるや。對えて云く、在り。師曰く、什摩の處に在りや。僧彈指して對

す。

ある時僧が参すると、師が云った、いまだどこに行つてたのだ。答えて云う、居りました。師が云う、どこに居たか。僧は彈指して師に向つて立つ。

僧有り師に礼拜す。師云く、什摩の處より来たる。對えて曰く、某處より来たれり。師云く、還た那个を將^もち得来たるや。對えて曰く、將ち得来たれり。師云く、什摩の處に在りや。僧彈指すること兩三下。

ある僧が師に礼拜する。師が云う、どこから来たか。答えて云う、かくかくしかじかの處から来ました。師が云う、あれをもつて来たか。答えて云う、もつて来ました。師が云う、どこにあるか。僧は二三度彈指する。

・これと似た問答が歸宗和尚の伝に見える(四一九五頁)。

三平和尚師に参ず。師、弓箭を架起して叫びて云く、箭を看よ。三平胸を擗開して受く。師便ち弓箭を抛下して云く、三十年者裏に在りて今日半个の聖人を射得たり。三平住持せし後ち云く、登時は將に謂えり、便宜を得たりと。如今看るに、却つて便宜を輸せり。

石門拈じて明眞に問う、作摩生か道わば即ち喚んで半个の聖人と作すを被るを免るることを得ん。明眞便ち喝して云く、這の野狐精。石門云く、委得せり、好手を弄すること莫れ。

三平和尚が師に参じた。師は弓箭をつがえて叫んで云う、矢に氣をつける。三平はずばり胸をひろげて矢を受ける勢いである。そこで師は弓箭を投げすてて云う、三十年ここに居て、今日は半个の聖人を射とめた。三平は住持したのちに云った、あの時はしてやったりと思っていたが、いま思うと、反対にしてやられてたんだな。

石門がこの話をとり上げて明眞に問う、どう云つたら、半个の聖人と呼ばれるのを免れ得ようか。明眞は大声で云う、この野狐

精め。石門が云う、わかった。やりてぶっちゃいけない。

- ・得便宜 まぐれ当りのチャンスに恵まれ、あるいは抜け目なく立ち廻って、うまく味を占めることをいう。輸便宜は正にその逆。「拈八方珠玉集」巻上に「丹霞一日與居士行次、見一泓水。士以手指云、得恁麼、也還辨不出。霞云、酌然是辨不出。士屏水、潑霞三下。霞云、莫恁麼、莫恁麼。士云、須恁麼、須恁麼。霞屏水、潑士三下。士云、正當恁麼時、堪作什麼。霞云、無外物。士云、得便宜者少。霞無語。士云、誰是落便宜者。」とある。入矢義高『龐居士語録』六五頁以下参照。
- ・石門 鼓山和尚をいう。
- ・明眞 安国和尚をいう。
- ・伝灯録十四の三平の伝、碧巖録八一則評唱参照。

師に弄珠吟有り曰く、落落たる明珠百千を耀かし、森羅万像鏡中に懸かる。光三千に透り大千を越え、四生六類が一靈源たり。凡聖は珠と聞かば誰か羨やまざらん、心を警起して求むれば渾に見ず。對面して珠を見るも珠を識せず、珠を尋ねて物を逐わば當時變ず。千般万般珠に沉うるの喩あるも、珠は百非を離れ四句を超ゆ。只だこの珠生ずるは是れ不生なるも、無生にして珠始めて住すと謂つには非ず。如意珠、大圓鏡、亦た人中に在らば喚んで性と作す。分身百億にして我が珠分れ、無始より本淨にして如今も淨し。日用いる眞珠是れ佛陀、何ぞ勞せん物を逐いて浪波波なることを。隱現即今二相無し、對面して珠を見る識得するや。

紫玉和尚、馬大師に嗣ぐ。襄陽に在り。師諱は道通、未だ實録を覩ざれば生縁を決せず。

襄陽の廉帥于迪相公、界内に處分して、凡そ行脚の僧有らば捉えて送らしむ。一僧の命を得るもの有ること無し。便ち殺すことはくの如くして無数なるを得たり。師此の消息を聞きて、相公の處に去かんと欲得ず。衆中に人の師に隨つものを見むるに近十來人有

り。師十人を領して恰かも界首に到るに、十人怕れて敢えて進まず。師猶なほ自界内に入る。軍人は師の来たるを見て便ち捉え、枷を著けて送上す。師、枷を著けて門外に到るや、納衣を著けて便ち廳に上る。相公劔を按じて大坐せり。便ち云く、咄、這の阿師、還た襄陽の節度使の斬斫自由なるを知道るや。師云く、還た法王生死を懼れざることを知道るや。相公云く、和尚頭邊還た耳有りや。師云く、眉目障碍無し。貧道相公と相見するに何の障碍か有らん。相公便ち劔を抛却し、公の衣服を著けて、便ち禮拜して問う、承らく教中に言有り、黒風其の舡舫を吹いて漂して羅刹鬼國に墮せしむ、と。此の意如何ん。師は便ち于迪と喚ぶ。相公顔色變異す。師曰く、羅刹鬼國遠からず。又た問う、如何なるか是れ佛。師は于迪と喚ぶ。相公應諾す。師云く、更に別に求むること莫れ。相公言下に大悟して便ち礼して師と爲す。

人有り藥山に學似す。藥山云く、者个の漢を縛殺せよ。僧便ち問う、和尚如何ん。藥山云く、是れ什麼ぞ。

襄陽の廉帥于迪相公は、管轄範圍に命令を下し、およそ行脚の僧があれば、とらえて送らしめた。行脚の僧は誰ひとり生きるを得なかつた。このように殺害すること無数であつた。

師はこのうわさを聞き及び、相公のところへ行こうと思つた。そこで修行僧の中から、師に隨行するものを募つたところ、ほぼ十人ばかりを得た。師は十人のお供をつれてあたかも国境にさしかかつた。すると十人のお供は恐れて、それ以上進もうとしなかつた。師がなおも于迪の勢力範圍へと踏み込んで行くと、軍人が師の来るのを見つけてさつそく捕え、首かせをつけて都へ送つた。

師は首かせをつけて都の入口に來ると、納衣を着け、それから役所に出頭した。相公は劔を按じてどつかと坐っている。師を見て云う、おい、このくそ坊主、襄陽の節度使様が切捨御免だと知っておるか。師が云う、法王が生死を恐れぬことを知っておられるか。相公が云う、和尚の頭じゃ耳がついているのか。師が云う、目は不自由ではないのだからわたしが相公にお目にかかるに何のさまたげもありませんまい。相公はやにわに劔をほおり投げ、正装に改めて禮拜して問うた、うかがいますところ、お経にこんな文句があります。黒風其の舡舫を吹き、漂わして羅刹鬼國に墮せしむと。これはどういう意味でしょうか。すると師は于迪と呼んだ。相公は顔色が変わる。師が云う、羅刹鬼國は遠くありませんな。又た問う、佛とはいかなるものですか。師は于迪と呼ぶ。相公

はははつと云う。師が云う、ことさらに求めてはならない。相公は言下に大悟し、礼して師とした。

ある人がこの話を薬山に示した。薬山が云う、この男をふんじばね。そこで僧が問う、和尚さんはどうですか。薬山が云う、何の話だ。

・教中有言云 法華經觀世音菩薩普門品の句。

・有人學似藥山云 伝灯録六では、「有僧學似藥山、藥山云、縛殺這漢也。僧云、和尚如何。藥山亦喚云、某甲。僧應諾。藥

山云、是什摩」とある。この方が良い。祖堂集のままでは意味が通じにくい。

僧問う、如何にしてか三界を出でん。師云く、徐裏許に在ること多少時ぞ。僧云く、如何にしてか出離するを得去らん。師云く、青山は碍げず白雲の飛ぶことを。

南源和尚、馬大師に嗣ぐ。袁州に在り。師諱は道明。洞山初めて南源に到りて便ち法堂に上る次いで、師纔かに洞山を望見して便ち云く、已に相見し了れり、更に上来するを用いず。洞山便ち堂に歸る。又た和尚の處に去ゆきて便ち問う、適来已に相見し了れりと道えり。什摩の處か是れ某甲と相見せし處なる。師云く、心心不間斷、流れて性海に入る。洞山云く、泊ほどんど錯ごつて放過せんとす。洞山五日の後、師に辞す。師云く、事有り閻梨に囑せん、得たりや。洞山便ち禮拜して云く、什摩の事有りや。師云く、多く佛法を學び、廣く利益を作なせ。洞山問う、多く佛法を學ぶことは即ち問はず。如何なるか是れ廣く利益を作す。師云く、一物も也た爲さざる即ち是。洞山便ち住すること兩年なり。

南源和尚は馬大師に法を嗣いで袁州に住した。諱は道明である。洞山が南源に到着するや法堂に上つたが、師は洞山を望見するや否や云つた、すでに相見した。あらためて来るには及ばん。そこで洞山は僧堂に歸つた。洞山は再び師の所へ行つて問う、さっきすでに相見したと云われましたが、どこのところがわたしと相見したところでしょうか。師が云う、心心不間斷、流れて性海に

入る。洞山が云つ、あやうく無罪放免にするところだった。

洞山は五日の後、師に別れを告げに行つた。師が云つ、ある事をあなたに頼みたいのだが、よろしいか。洞山は礼拝して云つ、どんな事ですか。師が云つ、多く仏法を学び、広く利益をなせ。洞山が問う、多く仏法を学ぶということについては問いません。どのようなのが広く利益をなすということでしょう。師が云つ、一物も爲さないといいことがそれだ。そこで洞山は二年の間とどまつた。

・ 心心不間断、流入於性海 今のところ出典が明らかでない。

・ 多學佛法、廣作利益 自利利他の行を云うのであろうが、成句としての出典を明らかにし得ない。

・ 一物也不爲 たとえば金剛經に「所有一切衆生之類、(中略)我皆令人無餘涅槃而滅度之、如是滅度無量無數無邊衆生、實無衆生得滅度者」とあるのなどを参照。

百丈和尚、馬大師に嗣ぐ、江西に在り、師諱は懷海、福州長樂縣の人なり。姓は黃。童年の時、母に隨つて親しく寺に入り佛を礼す。尊像を指して母に問うらく、此は是れ何物ぞ。母云く、此は是れ佛なり。子云く、形容人に似て、我に異らず、後亦た當に焉に作るべし。

・ これに似た話が卷四石頭和尚の伝に出ている。

自後僧と爲りて、志し上乘を慕い、直に大寂の法會に造る。大寂一見して之を延きて入室せしむ。師密に玄關に契いて更に他往する無し。

師平生苦節高行にして喩を以て言つこと難し。凡そ日給の執勞は必ず衆に先んず。主事忍びず、密かに作具を收めて、息わんこと

を請う。師云く、吾に徳無し。争でか合に人を勞すべけん、と。師遍く作具を求め、既に獲ずして亦た喰することを忘す。故に一日作さざれば一日食わずの言有りて、寰宇に流播せり。

師が平生苦節高行する様は、何にたとえようもなかった。およそ日々つつめとしての勞務には、必ず大衆の先頭に立った。主事が見かねて密かに作具をかくし、休息されんことを請うた。師が云うには、わしには徳がない。どうして人に骨おらせることができようか。師はうる／＼作具を探しまわり、見つからない上に食事するのも忘れる仕末であった。で、一日作さざれば一日食らわずという言葉が、天下に広まったのであった。

・主事 釋氏要覽云、主事四員、一監寺、二維那、三典座、四直歲。敕修清規云、直歲職掌一切作務、凡殿堂寮舍之損漏者、常加整葺。動用什物、常閱其數。役作人力、稽其工程、黜其游惰、毋縱浮食、蠹財害公。(禪林象器箋)これがそのまま今の場合に当てはまるかどうかは明らかでない。

僧有り、哭して法堂に入る。師云く、作摩そま作摩。僧對えて曰く、父母俱に喪せり。請う師日を擇べ。師云く、且く去りて明日来れ、一時に埋却せん。

ある僧がわん／＼泣きながら法堂に入つて来た。師が云う、なんだ、なんだ。僧が答えて云う、父母がともに亡くなりました。どうか葬式の日を選んで下さい。師が云う、しばらく去つて明日来なさい。一緒に埋めてやろう。

師は衆に謂いて曰く、我れ一人の西堂に傳語するものを要す。阿誰か去き得る。五峯對えて云く、某甲去かん。師云く、作摩そま生か傳語せん。對えて云く、西堂を見るを待ちて即ち道わん。師云く、什摩をか道う。對えて云く、却来して和尚に説似せん。

師が大衆に向つて云つた、西堂に伝言を頼みたいんだが誰が行けるか。五峯が云う、わたしが行きましょう。師が云う、どう伝言するか。答えて云う、それは西堂に会つてから云います。師が云う、なにを云うのか。答えて云う、それはもどつてから和尚さ

んに云います。

・いささか頓智嘶臭い。

師、瀉山の因みに夜深に參ずるを見る次いで、師云く、侂我がために火を撥開せよ。瀉山云く、火無し。師云く、我れ適來有るを見たり。自ら起ち来りて撥開す。一星火を見て夾起し来り、云く、這個是れ火ならずして是れ什摩ぞ。瀉山便ち悟る。

師が、瀉山が夜更けて參じたのに会った時、師は云った、お前さんどうか火を掻き出してくれんかね。瀉山が云う、火はありません。師が云う、わしはさつき有るのを見たよ。そう云って自分で立つて火を掻き出した。わずかな火種を見つけてつまみ上げ、云った、これが火でなくてなんだ。そこで瀉山は悟った。

師、瀉山と作務する次いで、師問う、火有りや。對えて云く、有り。師云く、什摩の處いすれに有りや。瀉山一枝木を把つて吹くこと兩三下し、師に過与す。師云く、虫の木を喰うが如し。

師が瀉山と共に作務していた時、師が問うた。火があるか。對えて云う、あります。師が云う、どこにあるか。瀉山は一本の枝を三度吹いて師に手渡した。師が云う、虫の木を喰うが如し。

・吹兩三下 火を吹き起すさま。

・如虫喰木 涅槃經卷二に「如蟲食木有成字者、此蟲不知是字非字、智人見之、終不唱言是蟲解字」とあるのによる。

問う、如何なるか是れ佛。師云く、汝は是れ阿誰ぞ。對えて云く、某甲。師云く、汝某甲を識るや。對えて云く、分明个。師は拂子を豎起して云く、汝は拂子を見るや。對えて曰く、見る。師便ち不語。

問う、どのようなのが佛ですか。師が云う、お前さんは誰だ。對えて云う、何のなにがしです。師が云う、お前さん何のなにが

しが分るか。答えて云う、はつきりと。師は拂子を立てて云う、お前さん拂子が見えるか。答えて云う、見えます。師はもう何も云わない。

一日有り普請する次いで、一僧有り。忽ち鼓聲を聞いて失聲大笑し、便ち寺に歸る。師曰く、俊なる哉、俊なる哉、此は是れ觀音入理の門なり。師、其の僧に問う、適来什摩の道理を見て即便ち大笑せしや。對えて曰く、某甲適来鼓聲の動ずるを聞けば、歸りて飯を喫するを得、所以に大笑せり。師便ち休す。長慶代つて曰く、也た是れ齋に因りて慶讚す。

ある日の普請の時、一人の僧が太鼓の音をひよいと聞いて、思わず声を立てて大笑いしたかと思うと寺に歸つた。師が云う、俊なるかな、俊なるかな、これこそ觀音入理の門だ。師はその僧に問うた、さっきはどういう理由で大笑いしたのだ。答えて云う、わたくしさつきは、太鼓の音が鳴るのを聞くと歸つてご飯が食べられるので大笑いしたのです。師はあきれてものが云えない。長慶が代つて云う、これもまた齋によつて仏法をほめたたえるものだ。

・因齋慶讚 卷十五金牛和尚の伝を参照。

問う、經に依りて義を解すれば三世佛怨。經を離ること一字なるも即ち魔説に同じ、なるとき如何。師云く、動用を固守すれば三世佛怨。此の外別に求むれば即ち魔作に同じ。

・依經解義云 像法決疑經に「像法中諸惡比丘不解我意、執己所見、宣說十二部經、隨文取義、作決定説。當知此人三世諸佛怨、速滅我法。」とあるのを参照。なおこの句は從容録五十八則に引かれている。

僧西堂に問う、有問有答は則ち問わず。不問不答の時如何ん。答えて曰く、爛却することを怕れて那な作そ摩。師も擊するを聞きて云く、從來この老漢を疑えり。僧云く、請う師道え。師云く、一合相不可得。

僧が西堂に問う、有問有答のことは問いません。不問不答の時どうですか。答えて云う、爛却するのを恐れてどうする。師はこの話を聞いて云う、從來この男はできると思っていた。僧が云う、どうか和尚さん一言云つて下さい。師が云う、一合相不可得。爛却 たとえば理趣經三に「復有衆生在於鑊湯、鐵杖翻轉、著之糜爛、唯有骨在、其命猶存」という時の糜爛に同じである。藥山に「不得絶却言語」という語がある。

・一合相不可得金剛經に、「以三千大千世界碎爲微塵、於意云何、是微塵衆、寧爲多不。須菩提言、甚多世尊。何以故。若是微塵衆實有者、佛即不說是微塵衆。所以者何。佛說微塵衆、即非微塵衆、是名微塵衆。世尊、如來說說三千大千世界、即非世界、是名世界。何以故。若世界實有者、即是一合相。如來說一合相、即非一合相、是名一合相。須菩提、一合相者、即是不可說、但凡夫人貪著其事」とあるものの取意である。

師、僧をして、章敬和尚の處に去き、他の上堂說法するを見る次いで、禮拜して起ち来り、他が一隻履を収めて袖を以つて上塵を拂い、倒頭覆下せしむ。其の僧去き到り、一一前の師指に依る。章敬云く、老僧罪過す。

・倒頭覆下 履を裏返して置いたのであるが、地獄にまっさかささまに落ちる人間の足のつらを聯想させる。

師行脚せし時、善勸寺に到る。看經せんと欲するも寺主許さずして云く、禪僧は衣服淨潔なるを得ず。恐怕らくは經典を汚却せん。師看經せんことを求めて志し切なり。寺主便ち許す。師看經し了つて便ち去る。大雄山に出世す。出世せし後供養主僧善勸寺に到り寺主を相看る。寺主問う、什摩いすれの處を離れしや。對えて曰く、大雄山を離る。寺主問う、什摩人が住する。對えて曰く、恰も和尚の行脚せし時、當寺に在りて看經したるに似たり。寺主曰く、是れ海上座なること莫きや。對えて曰く、是なり。寺主便ち合掌す、某甲實に是れ凡夫なり。當時他の人天の善知識を識せざりき。又た問う、這裏に来たるは今の什摩の事の爲なりや。對えて曰く、著疏せよ。寺主自ら行疏し、教化一切了つて、供養主と相共に百丈に上る。師は今の消息を委得し、便ち下山し来りて迎接して歸山

す。一切しりて後、寺主に禪床に上らんことを請うらく、某甲は一段の事有り、寺主に問わんと要す。寺主推し得ずして便ち昇座す。師寺主に問う、正に講ずる時作摩生。主云く、金盤上に珠を弄するが如くす。師云く、金盤を拈却する時、珠は什摩の處に在りや。寺主無對。又た問う、教中に道う、了了として佛性を見ること猶お文珠の如きに等しと。既に是れ了了として佛性を見る。合に佛に等しかるべし。什摩と爲てか却つて文珠に等しき。又た無對。此れに因りて便ち納を被して學禪す。号して涅槃和尚と爲す。便ち是れ第二の百丈なり。

師が行脚していた時、善勸寺にやつて来た。看經しようと思つたが寺主は許可しないで、云うには、禪僧は衣服がきたない。たぶんお經を汚すだろう。師が看經したいと願う氣持には切なるものがあつた。そこで寺主は許可を与えた。師は看經して去つた。のち大雄山に出世したが、出世の後、供養主の僧が勸善寺にやつて来て寺主に會つた。寺主が問う、どこからおいでましたか。答えて云う、大雄山から来ました。寺主が問う、どなたが住職しておいでです。答えて云う、ほらあの、行脚の時に、このお寺で看經していったあの和尚ですよ。寺主が云う、海上座なんですね。答えて云う、そうです。すると寺主は合掌して云う、わたしは全く凡夫だ。あの時あの人天の善知識が分らなかつたとは。また問う、ここに來られたのは何のためですか。答えて云う、疏を作つて下さい。寺主は自ら疏を持つて廻り、托鉢しおわると、供養主の僧とともに百丈山に上つた。

師はこの消息を知ると山から下りて来て、迎えいれて帰山した。型通りの挨拶がおわつたのち、寺主に禪床に上るよう頼んで云うには、わたしはあなたにたずねたい一段の事があるのです。寺主は辞しきれず昇座した。師が寺主に問う、正しく經論を講ずる時、どうされるか。金盤上に珠を弄するようにします。師が云う、金盤をつまみ去つたら珠はどこにありますか。寺主は答えられない。また問う、教典に云つています。了了として佛性を見ることが文殊に等しいと。了了として佛性を見ているのならば仏に等しいのでなければならぬ。それなのにどうして文珠に等しいのですか。また答えられない。これをきつかけとして納衣を被して禪の修行をすることになった。涅槃和尚というが、つまり第二の百丈和尚である。

・ 供養主 街坊化主を云う。 忠曰、勸化市鄆街坊、索得檀施、以爲大衆供料。(象器箋)

・疏 化疏を云うのであろう。忠曰、凡叢林化米化炭等、皆造疏、化主齋之去、一展示其意、二證非假竊也。

・金槃上弄珠 大慧語録二三、如盤走珠、無障無礙。

師一日有つて夜深睡る次いで、忽然として便ち覺し、湯を喫せんと欲得す。然れども侍者も亦た是れ睡り喚び得ず。久しきに非ざるの間にして、人有り門を敲いて侍者を喚んで云く、和尚の湯を喫せんと要す。侍者便ち起きて湯を煎、和尚の處に來たり。和尚便ち驚きて問う、阿誰か汝をして与摩に湯を煎來たらしむ。侍者具に前事を陳す。師便ち彈指して云く、老僧終に修行すること解わす。若し是れ解く修行する人ならば、人覺せず、鬼知らず。今日の下土地の我が心識の与摩の次第を造すを覷見することを被れり。

師はある日、深夜睡っているとき、ふと目ざめて湯が飲みたいと思った。しかるに侍者も睡っているので呼ぶことができない。間もなく門をたたく者がある。侍者を呼んで云う、和尚が湯を飲みたがっているぞ。そこで侍者は湯をわかして和尚のところへもつて來た。すると和尚はぱつととび起きて問うた、誰が湯をわかして持って來させた。侍者はつぶさに前の出來事を話した。すると師は彈指して云うた、わしはまるきり修行などできんのだわい。修行のできる人間なら、人も知らなきゃ鬼も知らんものだ。今日という今日は、わしの心識があんな風に動いたのを土地神にのぞかれてしまった。

師は雲岳を見て便ち五指を提起して云く、何个而也。雲岳云く、非なり。師云く、豈に然らんや。

・何个而也 読解不能。

師一日有つて法堂裏に坐し直に四更に到る。當時の侍者は便ち是れ雲岳和尚たり。三度和尚の身邊に來たりて侍立す。第三度來たるに和尚驚底に聲を失して便ち睡す。侍者便ち問う、和尚適來什摩の事有つて睡せるや。師云く、是れ汝が境界ならず。侍者云く、師に啓す、某甲は是れ和尚が侍者なり。若し某甲が与に説かざれば什摩人の爲にか説かん。師云く、問うを用いず。是れ汝が問う底の

事ならず。兼ねて是れ老僧が説く底の事ならず。侍者云く、師に啓す、百年の後知らんことを要せん。乞う和尚慈悲せよ。師云く、人を苦殺す。老漢未だ人と造らざるなり。適来忽然として菩提涅槃を憶著せり。所以に与摩に唾せり。侍者云く、師に啓す、若し此くの如くならば、如許多の時、什摩に困りて菩提涅槃、了義不了義と説きしや。師云く、人に分付不著なり。所以に侏に向つて道えり、是れ侏が問う底の事ならず、兼ねて是れ侏が境界ならずと。

師はある日法堂で坐禅していたが、そのまま四更に及んだ。その時の侍者があの雲岳和尚である。三度和尚の身边に来て侍立したが、三度目に来たとき、和尚はだしぬけに声を失して唾をはいた。侍者が問う、和尚さん今どういうことがあつて唾をはいたのですか。師が云う、お前さんの境界ではない。侍者が云う、申し上げます、わたくしは和尚の侍者です。もしわたくしに言つてきかせないとすると、誰に言つてやろうとこののですか。師が云う、聞きなさんな。お前さんがたずねることもなけりや、わしが答えることでもない。侍者が云う、申し上げます、百年ののちにも知りたいでしょう。どうかお慈悲をたれて下さい。師が云う、やりきれんことだ。わしはまだ一人前になっていないのだ。さつきよいと菩提涅槃のことを思い起した。だからあんな風に唾をはいたのだ。侍者が云う、申し上げます、もしそうならあんなに長い間、どうして菩提涅槃や了義不了義のことを説いてこられたのですか。師が云う、人にちゃんと云つてやれることじゃない。だからお前さんに云つたじゃないか。お前さんの聞くことではないし、お前さんの境界でもない、と。

・ 驀底失聲便唾 馬祖にも似た話がある。

・ 不是侏境界 無量寿経上に「比丘白佛、斯義弘深、非我境界」

師は垂語して云く、咽喉唇吻を併却して速に道い將ち来れ。人有りて云く、學人道い得ず、却つて請う師道え。師曰く、我は侏に向つて道つを辞せざるも、自後我が兒孫を欺らん。雲岳對えて曰く、師今有り。師便ち失聲して云く、我が兒孫を喪えり。

師は垂語して云う、のどや口をふさいでしまつて、さつさと言いなさい。ある人が云う、わたくしには言えません。どうか和尚

さんの方で言ってお下さい。師が云う、わしはお前さんに言っておやることは辞さんが、そうすると以後我が見孫をみくびることに
なる。雲岳が答えて云う、和尚さんには今その見孫があります。師は声を失して云う、我が見孫をだめにした。

・師が失聲したのは、雲岳にがつくり来たのと同時に自分にもがつくり来たからのようである。師には「見與師齊、滅師半
徳、見過於師、方堪傳授」という語があるが、言っておいたのは「見與師齊」ならしめ、「見過於師」なる見孫の可能性
を撥無することになる。でああ云ったのであろうが、その言葉に雲岳和尚がさっそくひっかかって自後などと言わずに今
その見孫がありますよと名のり出たものだから、師はやれやれと言っているのである。併却咽喉膺吻速道將來などと云
い出したことも後悔していないとは云えない。伝灯録の百丈の伝、碧巖七十則等参照。

師垂語して云く、見河能く香象を漂す。僧便ち問う、師見るや、師云く、見る。僧云く、見し後如何ん。師云く、見見無二。僧云
く、既に見見無二と言えは見を以て見を見ず。若し見更に見ば、爲た前見るか、爲た後見るか。師云く、見見の時、見は是れ見に非
ず、見すら猶お見を離るれば見も及ぶこと能わず。

・見見之時以下楞嚴經二の句。義疏二之二に云う、「眞用顯發、照眞體時、體之與用俱非見相。若以上見爲用、下見爲體、用
照體時、理智溷然、無體可得、用相亦亡。故云見非是見。若以上見爲體、下見爲用、體發用時、無法可照、亦不名見。」(中
略)眞見自體尚離見相、無體可得、豈令見用照所及乎。又見體尚無體、豈及有見用」。 (大39一八五四a)

師垂語して云く、古人云原無云字、一手を擧げ、一指を豎つる是れ禪、是れ道と。此の語は人を繫縛して住む時無し。假饒い
説かざるも亦た口過有り。惣上座拈じて翠岳に問う、既に説かず、什摩と爲てか却つて口過有る。翠岳云く、只だ説かざるが爲なり。
惣上座便ち擲す。兩日を隔てて翠岳却つて惣上座に問う、前日与摩に祇對して上座の意旨に稱わず。便ち請う、上座慈悲を捨てず、曲
げて方便を垂れよ。既に説かず、什摩と爲てか口過有る。上座手を擧起す。翠岳五躰投地して禮拜し、聲を出だして啼哭す。

師が垂語して云う、古人が云っている、手をあげ指を立てるのも禪であり道であると。此の語は人を繫縛して止む時がない。しかし何も云わなくても口過がある。慧上座が拈じて翠岳に問う、何も言わないのにどうして口過があるんだ。翠岳が云う、何も言わないからこそです。慧座はゲンコツを喰らわせる。二日の後、こんどは翠岳の方が慧上座に問う、先日はそのように答えて上座の意にかなわなかった。どうかお慈悲です。わかるようにしてやって呉れませんか。何も言わないのにどうして口過があるのでしょうか。上座は手をあげる。翠岳は五躰投地して礼拜し、声を出して號哭する。

・假饒不説亦有口過 龐居士語録に「靈一日問居士、道得道不得俱未免、汝且道未免箇什麼麼云」とある。

師、侍者をして第一座に問わしむ、實際理地一塵を受けず、佛事門中一法も捨てず。是れ了義教裏に收むるや、是れ不了義教裏に收むるやと。第一座云く、是れ了義教裏に收む。侍者却來して和尚に擧似す。和尚侍者を打つて院を趁い出す。

・齊雲和尚の伝(三一九五頁以下)に「因説百丈打侍者因縁、有人拈問、百丈打侍者、爲上座打、爲侍者打。師云、里正不了、累及家丁」とあるのを参照。

問う、如何なるか是れ大乘入道頓悟の法。師答えて曰く、汝先ず諸縁を歇くし万事を休息せよ。善と不善との世間一切の諸法並びに皆な放却して、記憶すること莫く、縁念すること莫れ。身心を放捨して其れをして自在ならしめよ。心木石の如くにして、口に辯ずる所無く、心に行ずる所無く、心地空の若くならば慧日自ら現わること猶お雲開けて日出するが如きに相似ん。俱に一切の攀縁を歇くし、貪嗔愛取垢淨の情盡きれば、五欲八風に對して見聞覺知の縛する所を被らず。諸境の惑を被らず。自然に神通妙用を具す。是れ解脱人にして、一切の境に對して心に靜乱無く、攝せず散せず。一切聲色に透つて滯碍有ること無し。名つけて道人と爲す。但し一切の善惡垢淨有爲世間の福智の拘繫を被らざれば即ち名つけて佛慧と爲す。是非好醜、是理非理の諸の知見惣て盡き、繫縛を被らず、處處に自在なるを名つけて初發心の菩薩便ち佛地に登ると爲す。一切諸法本より自ら空なりと言わず、自ら色なりと言わず、

亦た是なり非なり垢なり淨なりと言わず、亦た心の人を繫縛する無し。但だ人自ら虚妄に計著して若干種の解、若干種の知見を作す。若し垢淨の心盡きなば、繫縛に住せず、解脱に住せず、一切有爲無爲の解無く、平等の心量もて生死に處し、其の心自在に、畢竟虚幻塵勞蘊界生死諸人と和合せず、迥然として寄る無く、一切拘せず、去留無碍、生死に往來すること門の開合するが如きに相似ん。若し種種の苦樂の意に稱わざる事に遇うも、心に退屈無く、名聞衣食を念せず、一切の功德利益を貪らず、世法の滯する所と爲らず、心親しく受すると雖も苦樂は懷に干らず。飢食もて命を接ぎ、衣を寒暑に補つて兀兀として愚なるが如く聾するが如きに相似なば、稍相親しむの分有らん。生死中に於いて廣く知解を學び、福を求め智を求むるは、理に於いて益無し。却つて知解境風の漂却するを被り、生死海裏に歸せん。佛は是れ求むる無きの人、之を求むれば則ち乖く。理は是れ求むる無きの理、之を求むれば則ち失す。若し求むる無きに取すれば、復た求むる有るに同じ。此の法は無實、亦た無虚。若し能く一生心木石の如きに相似なば、陰界五欲八風の漂溺する所と爲らず。則ち生死の因断じ、去住自由にして、一切有爲因果の縛する所と爲らず。他時還た無縛身を以つて同じく物を利し、無縛心を以つて一切に應じ、無縛慧を以つて一切の縛を解かん。亦た能く應病与藥す。

・親分 大梅法常の伝に、「因夾山与定山去大梅山。路上行次、定山云、生死中無佛則非生死。夾山不肯、自云、生死中有佛則不迷生死。二人相不肯、去到大梅山、夾山自問、此二人道、阿那个最親。師云、一親一疎。夾山云、阿那个是親。師見苦問乃云、且去、明日來。夾山明日來問、昨日未蒙和尚垂慈、未審阿那个是親。師云、問者不親、親者不問」とあるのを

参照。

問う、如今受戒して身口清淨、已に諸善を具す。解脱するを得るや。師答えて曰く、小分解脱す。未だ心解脱を得ず。未だ一切解脱を得ず。問う、如何なるか是れ心解脱。師答えて曰く、佛を求めず、知解を求めず、垢淨の情盡き、亦た此の無求を守りて是と爲さず。亦た盡處に住せず、亦た地獄の縛を畏れず、天堂の樂を愛せず、一切法に拘せられずして始めて名づけて解脱無碍と爲す。即ち身心及び一切皆解脱と名づく。汝言つこと莫れ、小分の戒善有り、將つて便ち了せりと爲すと。恒沙の無漏の戒定慧門の都て未だ

一毫も渉らざる有り。努力して猛く作せ。早与、耳聾し、眼暗み、頭白面皮皺するを待つこと莫れ。老苦身に及び、眼中涙を流し、心中悼惶するも未だ去處有らじ。与摩の時に到つて、脚手も整理し得ざらん。縦い福智多聞有るも都て相い救わず。心眼未だ開けざるが爲に、唯だ諸境を縁念するのみにして、返照することを知らず。復た道つを見ずや、一生有する所の悪業悉く前に現じ、或いは忻び或いは怖る。六道の五蘊現前に盡く見、嚴好の舍宅、舟船車輦光明顯赫たり。自心の貪愛を縦まにするが爲に、見る所悉く變じて好境と爲る。見る所に随つて重處に受生し、都て自由の分無く、龍畜良賤も亦た捨に未だ定めず。

・去處 報慈和尚の伝に「又時上堂云、四方來者從頭勘過、勿去處底、竹片痛決、直是道得十成、亦須痛決過」。また南泉和尚の伝に「師問院主、忽有人問、王老師什摩處去、你作摩生道。院主無對。曹山代云、但道作摩。曹山代云、待有去處則向和尚道」。

・整理脚手不得 手足をどう働かせていいかわからないでいること。

・重處 仰山の伝に「正涉境時、重處偏流」(五十七頁)。また洞山の伝に「問、正与摩時如何。師曰、是閻梨窠窟。僧曰、不与摩時如何。師曰、不顧占。僧云、不顧占、莫是和尚重處不。師曰、不顧占、重什摩。僧曰、如何是和尚重處。師曰、不擊拳向閻梨。僧曰、如何是學人重處。師曰、莫合掌向某甲。僧曰、任摩則不相干也。師曰、誰共你相識。僧曰、畢竟如何。師曰、誰肯作大、誰肯作小」とあるのを参照。

問う、如何にしてか自由を得ん。師答えて曰く、如今五欲八風に對して情に取捨無く、垢淨俱に亡ずれば、日月の空に在りて縁せずして照らすが如し。心木石の如く、亦香象の流を截ちて過ぐるが如く、更に疑滯無くんば此の人天堂地獄も攝する能わざるなり。又た云く、讀經看教は語言皆な須らく宛轉として自己に歸就すべし。但是る一切の言教は只だ如今の鑒覺の性を明むるのみ。自己但し一切有無諸境の轉ずることを被らざれば、是れ汝原作故導師なり。能く一切有無の境法を照破する是れ金剛、即ち自由獨立の分有り。若し任摩に得る能はざれば、縦令い十二圍陀經を誦し得るも、只だ増上慢を成すのみ。却つて是れ佛を謗る。是れ修行ならず。讀

經看教は、若し世間に准ずれば是れ好善の事なり。若し理明人の邊に向つて數うれば、此は是れ人を壅塞す。十地の人も脱去せずして、生死の河に流入す。但だ知解語義句を求覓することを用いざれ、知解は貪に屬す。貪は變じて病と成る。只だ如今も但し一切有無の諸法を離れ、三句外に透過すれば自然に佛と差無し。既に自らは佛なり。何ぞ佛は語るあた解あわらずと慮らん。只だ是れ佛ならずして、有無諸法の轉ずることを被り、自由なるを得ざるを恐るのみ。是を以て理未だ立たずして先に福智の載し去る有るは、賤の貴を使うが如し。如かず、理先に立ち、後に福智有らんには。時に臨んで作得し、土を捉えて金と爲し、海水を變じて蘇酪と爲し、須弥山を破して微塵と爲し、一義を無量義と作し、無量義を一義と作す。

・ 香象截流而過 韓婆沙論四に「作譬喩三獸渡河、兔馬香象。兔者浮而渡河、馬者少多觸沙而渡、香象者盡底蹈沙而渡」。

・ 宛轉 するりと。

・ 透過三句外 藥山の伝に「師問僧、近離什麼處。對曰、近離百丈。師曰、海師兄一日十二時中、爲師僧說什麼法。對曰、或曰三句外省去、或曰六句外會取、或曰未得玄鑿者且依了義教、猶有相親分。師曰、三千里外、且喜得勿交涉」とあるのを参照。

自餘の化縁の終始は備に實録に陳ぶ。勅謚大智禪師大寶勝の塔。

魯祖和尚、馬大師に嗣ぐ。池州に在り。師諱は寶雲、機格玄峻にして、學徒來り參ずれば、面壁して坐するのみ。

問う、如何なるか是れ言いて言わざる。師云く、汝が口は什麼の處に在りや。對えて云く、某甲に口無し。師云く、何を將つて茶飯を喫するや。自後洞山代つて云く、他はかれ飢えず、什麼をか喫せん。

問う、言つて言わないとはどういふことでしょうか。師が云う、お前さんの口はどこにあるか。答えて云う、わたしには口があ

りません。師が云う、何を使って茶飯を喫するのか。のち洞山が代語して云う、かれは飢えない、何を喰べるといふのか。

・他不飢、喫什摩 我不飢云とあつてほしいところ。

問う、如何なるか是れ諸佛の師。師云く、頭上に寶蓋生ずる者、是ならずや。僧云く、如何にすれば則ち是ならん。師云く、頭上に寶蓋無し。

問う、諸佛の師とはどのようなものですか。師が云う、頭上に寶蓋のある者だ。そうじゃないか。僧が云う、どうしたらよろしいでしょう。師が云う、頭上に寶蓋無しだ。

南泉和尚到る。師便ち面壁して坐す。南泉手を以て師の背を拍つ。師云く、你是れ阿誰ぞ。泉云く、普願。師云く、如何ん。泉云く、也た尋常。師云く、汝は何ぞ多事なる。

南泉和尚がやって来た。すると師は面壁して坐つた。南泉は手で師の背中をぼんとつつ。師が云う、お前は誰だ。南泉が云う、普願。師が云う、どうした。南泉が云う、いや別に。師が云う、おせっかいな奴だ。

南泉一日有つて菜園を看る。南泉石を把つて園頭を打つ。僧は頭を廻らして是れ師なるを看る。其の僧威儀を具して禮拜して便ち問う、和尚は適來豈に是れ學人を驚覺せんとせしならずや。南泉便ち足を躑つけて云く、驚覺は則ち且く置く。任摩の時作摩生。其の僧無對。

南泉僧に教すらく、你是魯祖の處ゆに去け、彼中に到らば便ち來由有らん。其の僧南泉を辞して便ち魯祖の處ゆに去く。師纔かに僧の來るを見るや便ち面壁して坐す。其の僧意おに在あかずして南泉に却歸す。南泉問う、魯祖の處ゆに到りしや。對えて曰く、到れり。泉曰く、廻ること太だ速きか。對えて曰く、魯祖和尚纔かに某甲を見て便ち面壁して坐せり。所以に轉じ來たれり。南泉便ち云く、王老

僧初めて出世せし時より、你諸人に向つて、佛未だ出世せざる時に向つて、なほ 尙自一个半个を得ず。是れ伊かれ与摩に驢年にして一个半个を得んや。

安國和尚拈じて雲居に問う、魯祖は過の什摩の處に在りて南泉の呵嘖を被れるや。雲居便ち呵す。安國聲を出だして啼哭す。雲居云く、却つて讚嘆を成す。安國此れ従り哭することを止む。

保福拈じて長慶に問う、魯祖は什摩の切峻の處有りて、南泉が此の語を招き得たるや。長慶云く、己を退けて人を進むるは万中到一个無し。

長慶此の因縁を擧して云く、他家面壁して坐すれば、个の摸捺の處有り。忽然として堂堂底に坐すれば、你は什摩の處に向つてか摸捺せん。僧龍泉に問う、只だ怡山の与摩に道うが如きんば意作摩生。泉云く、聾を持して聴を得たり。

南泉はある日菜園を見廻つていたが、石をひろつて團頭を打つた。その僧はぶりむいて和尚であることに気付くと威儀を正して礼拜し、問つた、和尚さんはいまわたしに活をいれようとなさつたのですね。南泉は足をあげて云う、活のことはしばらくおいておこつ。こんなときどつする。僧は答えられないでいる。

南泉は僧に論して云う、魯祖和尚のところに行きなさい。あそこに行つたらきつときつかけがあるだろつ。その僧は南泉を辞去して魯祖のところへ行つた。師は僧のやつて来るのを見るやいなや面壁して坐つた。その僧はわけがわからず南泉に帰つた。南泉が問う、魯祖和尚のところへ行つたのか。答えて云う、はい。南泉が云う、もどるのがちとはずぎはせんか。答えて云う、魯祖和尚はわたしを見たとき壁を向いて坐つたのです。だからもどつて来たのです。南泉が云う、このわしは初めて出世した時から、みんなに向つて佛未出世の時点で躰會せよと云つておるのに、一个も半个も得ておらんだ。やつこさんあんな風に驢馬の年とりつづけて一个半个ができるのか。

安國和尚が拈じて雲居に問う、魯祖はどこに過があつて南泉に責められたのですか。とたんに雲居は安國を叱りとばす。安國は聲を出して泣く。雲居が云う、責めるどころかほめたたえているのだよ。安國はそこで泣くのをやめる。

保福が拈じて長慶に問う、魯祖にどんなきびしさがあって、南泉のこのことばを招いたのだらう。長慶が云う、自分を退けて人を進めるものは万人中一人もないと云うからね。

長慶がこの因縁を挙げて云う、和尚が面壁して坐るからつかみどころもあるけれども、ひょっとして堂堂と坐ったらどこでつかまえようというのだ。僧が龍泉に問う、怡山和尚があつたのはどういう意味ですか。龍泉が云う、つんばの上におしになった。

・ 來由 長慶の伝に「初參見雪峯、學業辛苦、不多得靈利。雪峯見如是次第、断他云、我与你死馬醫法。你還甘也無。師對云、依師處分。峯云、不用一日三度五度上來、但如山裏燎火底樹種子似、息却身心。遠則十年、中則七年、近則三年、必有來由。師依雪峯處分、過得兩年半。有一日心造坐不得、却院外遠茶園三匝了樹下坐、忽底睡著、覺了却歸院、從東廊下上、纔入僧堂見燈籠火、便有來由、便去和尚処云とあるのを参照。

・ 王老僧南泉の自稱。保福和尚の伝にも用例が見られる。

・ 向佛未出世時躰會 南泉の伝の最初の上堂参照。

・ 龍泉 はつきりしないが荷玉和尚か。

・ 怡山 長慶のこと。

高城和尚、馬大師に嗣ぐ。師諱は法藏、未だ行録を覩ず。化縁の終始を決せず。

師に歌行一首有り、古人義を重んじて金を重んぜず、曲高くして和寡く知音勿し。今時の志士還た此の如く、語黙動用跡尋ね難し。嗟する所は世上岐路の者、終日崎嶇として狂しく心を用う。平坦の梅檀肯えて取らず、要す須らく嶮に登りて椿林を訪ぬるべし。窮子は父を捨てて遠く逃逝し、却つて本舎に於いて知音を絶つ。貧女は宅中無價の寶ありて、却つて秤を將つつて他人の金を賣る。心無相なれば用還つて深く、無常の境界侵す能わす。運用能く隨う高きと下きと、靈光は且らく是れ浮沈するならず。無相無心にして能く躍を運らし、聲に應じ色に應じ方に隨つて照らす。方に在りと雖も而も方に在らず、任運に高低して惣に能く妙なり。亦た無頭にし

て復た無尾、靈光運運何れよりか起る。只今起る者は便ち是れ心、心用明時更何俗。方に居らず、處の覓る無し、運用蹤無く復た跡無し。如今明覓の人を識取し、終朝漫りに別に的を求むること莫れ。勲心に學び、藁林に近づき、病眼を將て花針を認むること莫れ。説教は本より窮む無相の理、廣讀は元來心を識らず。心を了取し、境を識取し、心を了し境を識せば禪河靜かなり。但し能く境を了せば便ち心を識し、方法は都て闡婆の影の如し。勸らく且く學びて師と爲ること莫れ、高きに登りて下に向いて窺うことを用いざれ。平源不用金剛鑽、劔刃の中に錯つて錐を下す。向前來、人我する莫し、山僧に曲有り人の和する無し。空無相を了すれば即ち法師、綾羅將て幡を作ることを用いず。可中も了すれば大だ希奇、大人は幽邃にして不思議。自家に壞却す眞寶藏、終日人より布衣を乞ふ。境界を取すれば、妄情生ず、只だ水面の一波成るが如し。但し能く境に當つて情計無くんば、遠つて水面の本來平らかなるに同じ。大軀に應じ、小軀に應じ、運用は只だ隨う如意珠。被毛戴角して形は異ると雖も、能應の心跡は殊ならず。眼に應する時は千日の若く、万像は影質を逃がるる能はず。凡夫は只だ是れ未だ曾つて觀ず、那ぞ得たる自ら輕んじて退屈することを。耳に應する時は幽谷の若く、大小の音聲足らざるは無し。什方の鐘鼓一時に鳴り、靈光運運常に相續す。意に應する時は分別を絶す、森羅を照燭して長に歇まず。山河石壁の間に透過し、要且つ照らす時常に寂滅す。境は自ら虚なれば須らく畏るべからず、終朝照燭するも形の對する無し。設た使い浮幻の身を任持するも、運用都て舌身意無し。

師は又た大乘經音義を集す。海藏に流通せり。

・曲高和寡 白雪陽春の曲。

・平坦栴檀 平地に生えている栴檀。

・窮子捨父云 法華經信解品。

・貧女宅中云 涅槃經七。

・運運 ？

・花針 西溪叢語に詳しい考証がある。

・説教？

・平源？

・原文のまま残したものはなはだ読みにくい箇所である。

章敬和尚、馬祖に嗣ぐ。師諱は懷暉、姓は謝、泉州同安縣の人なり。

僧有り、錫を持して到り、師を遶ること三匝、錫を振って立つ。師云く、是、是。其の僧無對。長慶代つて云く、和尚が佛法、心は何れに在りや。

此の僧又た南泉に到り、師を遶ること三匝、錫を振って立つ。南泉云く、是ならず、是ならず。風力の轉ずる所終歸ついにに敗壞す。僧云く、章敬和尚は某甲に向つて是なりと道えり。和尚は什摩に因りてか是ならずと道う。南泉云く、章敬は則ち是、汝は則ち是ならず。長慶代つて云く、和尚は是れ什摩の心行ぞ。

ある僧が錫をたすさえてやつて来て、師をめぐることに三匝して、錫をふるって立った。師が云う、よし、よし。其の僧無對。長慶が代つて云う、和尚の佛法は中心がどこにあるのですか。

この僧こんどは南泉のところへやつて来て、師をめぐることに三匝して錫をふるって立った。南泉が云う、だめ、だめ。風力の動かすものにははついに敗壞するということではないか。僧が云う、章敬和尚はわたしによしとおっしゃいました。和尚さんはどうしてだめだと云われるのですか。南泉が云う、章敬和尚はよいが、お前さんはだめだ。長慶が代つて云う、和尚さんどういふつもりですか。

・遶師三匝振錫而立 慧忠國師の伝「師在黨子谷時、麻谷來、遶師三匝、震錫一下。師曰、既然任摩、何用更見貧道。又震錫一下、師呵曰、這野狐精。長慶代曰、大人什摩心行。又代曰、若不與摩、爭識得和尚」。また一宿覺の伝に「恰遇大師上

堂、持錫而上、遶禪牀三匝而立。六祖問、夫沙門者具三千威儀、八万細行、行無虧名曰沙門。大德從何方而來、生大我慢云とあるのを参照。

・風力所轉云 維摩經方便品からの取意。

・なお碧巖錄三十一則参照。

問う、心と法と滅する時如何ん。師云く、野人汚れ無し、徒らに斫を運らすを勞するのみ。人有り、洞山に攀似す。洞山云く、此の如しと雖も須らく作家に親近して始めて得べし。僧云く、什摩の處に向つてか斫を運らさん。洞山云く、不到の處。

問う、心と境とがなくなる時どうですか。師が云う、野人に汚れはない。斧をふるっても無駄だ。ある人が洞山に攀似する。洞山が云う、それはそうだけれども作家に親近してはじめてよいのだ。僧が云う、それはどういう意味ですか。洞山が云う、斧をふるわなければならない。僧が云う、どこで斧をふるうのですか。洞山が云う、不到の處だ。

・野人無汚云 莊子二十四徐無鬼篇にある話による。

・不到處 南泉の伝に「知不到處、切忌說著」とある。

師、興善大徹禪師の處に到る。禪師問う、什摩いすれの處より来たるや。師云く、天台より来たれり。禪師云く、天台高きこと多少ぞ。師云く、自ら看取せよ。雲居進んで云く、眼を盡くして見るも見えざる時又た作摩生。自ら代つて云く、世間に異る。

師は興善大徹禪師のところへ行つた。禪師が問う、どこから来たか。師が云う、天台山から来ました。禪師が云う、天台山の高さはどのくらいか。師が云う、自分で見てとつて下さい。雲居が問答を進めて云う、どんなに目をこらしても見えない時はどうです。自分で代つて云う、世間のものとはちがっている。

・大徹禪師 馬祖の法嗣興善寺惟寛の謚号。

・異於世間 寒山詩「人問寒山道、寒山路不通」。

師は大寂の宗教に契いてより、緇儒法會に奔赴す。自以(？)道は天庭に響き、鳳闕に聞ゆ。天和の初、徵詔を奉じ、位に對して僧録首座已下に排す。聖上僧首に顧問す。對えて云く、僧は夏臈に依る。師當時六十夏なり。勅して奉遷して座首と爲す。聖上に對して禪門の法教を言論す。聖顔大いに悦び、慇敬常に殊なる。恩澤面臨し、宣して草敬寺に住せしむ。大いに京都を化し、高く佛日を懸く。都城の名公義學競い集まり、擊難する者雲の如し。師は乃ち大いに雷音を震わし、群英首伏す。投針意に契う者、意を得て言を忘る。元和十三年戊戌の歲十二月二十一日遷化す。勅謚大覺禪師大賣光の塔。長沙賣島の碑銘に曰く、實姓は謝、釋子を稱し懷暉と名づく。未だ字を詳かにせず。泉州安集里に家す。官品無く佛位有り。丙申に始まりて乙未に終す。

・投針契意 伝灯録二提婆の伝に「龍樹知是智人、先遣侍者以滿鉢水置於座前。尊者覩之、即以一針投而進之。欣然契會」とある。もともと西域記に出る。

・得意忘言 莊子外物篇の語。

祖堂集卷第十四